

鮎川信夫と『新領土』(その2)

中 井 農

4. 『新領土』の周辺 1937年の平和的な印象記

1937年、春山行夫が編集を担当する『セルパン』の9月号は、7月7日の盧溝橋事件を受けて、巻頭に「戦争と軍備への認識」をおき、「支那をどう見るか」「北支事變と戦時體制」と記事を組んだ。さらに、スターリンの肅正事件に焦点をあてた前月8月号「ソヴェト特輯」につづいて「ソヴェトの現状」を、そして、スペイン内乱に関する一連の記事として、「スペイン文化擁護國際作家會議報告」を掲載した。

同号「新映畫」欄は、“九月末までに封切豫定の映畫”のなかで、その“原作が最近の讀書界を風靡した”ものとして、『大地』と『南方飛行』¹をあげ、「映畫評」欄はこの二作²をとりあげた。しかしながら、これらが果たして年内に上映されたか否か、その消息を追うことは難しい。“九月末に至つて、突然外國映畫の輸入を當分禁止⁽³⁾”³され、やがて“年内洋畫の輸入禁止といふので、在庫品のある社は抱へ込んで出し惜しみをする。また手持品のない社はない社で、最後の切札として大事に抱へ込む”⁴事態となったからである。ただし、11月号は、ニュース劇場の盛況を伝えている。“この三ヶ月ほどの間に新しく開場されたもの乃至は舊來からの映畫館をニュース劇場に改めたものは東京だけで十五館ちかく”あり、ほかに“普通の映畫劇場がナイト・ショウの形式で本興行終了後ニュースをやつてゐる所もあり”その“いづれもが毎日滿員の盛況を呈して”いた。“申合はせたやうに呼び物は日支事變映畫”⁵であった。

6月に発足した近衛文麿内閣のもと、盧溝橋での衝突は「北支事變」と呼ばれた。時局は、8月24日、「國民精神總動員実施要綱」の閣議決定へと展開

する。9月2日、政府は事変の拡大にあわせて「支那事変」と改称。内閣情報委員会から昇格した内閣情報部は、25日、国民歌の詞と曲を募集し、11月3日に締め切られる⁶。同月8日、中井正一ら『世界文化』グループの検挙、翌月12月、1日、大本營の南京攻略命令、15日の第一次人民戦線事件につづく26日、森川幸雄の詞に北原白秋と佐佐木信綱が手を入れた「愛國行進曲」が発表される。作曲は「軍艦行進曲」の瀬戸口藤吉であった。六社から同時に発売されたレコードは百万枚の売れ行きで、1937年はこの歌で暮れた⁷とされる。森川のペンネームは森川伸樹。西條八十が主宰する『蠟人形』の投稿詩人⁸であった。

モダニズム系の詩誌としては、『新領土』よりはやく、1935年7月創刊の『VOU』があった。この年、10月15日に刊行された同誌第20号の「はがき通信」に、長田恒雄は事変後の日常を記している。

北園の詩集<夏の手紙>が、秋になつて出版され、僕らは軍艦マアチで陸軍歩兵少尉の出征を見送つてゐる。へんちくりんな季節である。

このごろ、映畫ばかり見てゐる。特にニュースは仲々おもしろい。しかし必ずしもザハリヒだとは言へない。

新しいタバコ<つばさ>はまづい⁹。

『夏の手紙』は奥付によれば9月5日の発行である。<翼>は三機編隊を組んだ飛行機の意匠で8月に登場¹⁰したものだが、その味は“へんちくりんな季節”のためであったかもしれない。そして、この10月1日から、“出征将兵の留守宅門前に印が付けられる”¹¹ことになっていた。

『VOU』を主宰する北園克衛もこの季節にあって考えざるをえなかった。北園の対応は、“最近歐米諸國に慢延しつつある支那の我國に對するスキヤンダルを是正するために、”この号から海外に發送する『VOU』に“外務省情報部又は文科事業部發行の歐文パンフレットを挿入して國家に對するVOUクラブの奉仕を實行すること”であった。“此の非常時に於ける詩人の國家的奉仕は單に軍歌を作ることのみではない”¹²からである。創刊されたばかりの『新領土』もまた、“へんちくりんな季節”を迎えていた。

『新領土』の村野四郎は、『文藝汎論』1937年12月号に、この年の詩壇を回顧する。題して「平和的な印象記 昭和十二年度詩壇について」、その冒頭である。三文字が欠落している。

今年も遂にバンザイ、バンザイといふ悲痛な聲と、あはたゞしい
 の出征の旗の中に終らうとしてゐる。この下半期は戦争による異常な
 ニュースの汎濫で、文學者などの地味な仕事は片隅に押しつめられた形
 であつた。しかしこの事變による衝撃は凡ゆる藝術家の精神的行動にも
 一つの現実的な影響を興へたことは事實である。日に報導される夥し
 い同胞の死や、政治及經濟の異常に緊張した國際情勢は彼らが今まで彼
 らの世界の中で経験もしなかつたやうな一つの生々しい命題に觸れるこ
 とを強要した¹³。

村野によれば、この年5月に創刊された『新領土』は、“近藤東、上田保、
 春山行夫、村野四郎、饒正太郎の共同編輯により、毎月夥しい海外文學の紹
 介と作品によつて、幅廣い運動を若い時代の青年達に呼びかけた”もので
 あり、“實際の編輯は、上田保によつて萬事遂行された”¹⁴のである。

彼らの詩誌は、このように総括される。

「新領土」は「詩法」時代の新精神とテクニツクの修練時代を経て、は
 じめて新しい一つの軌道に乗つた觀がある。彼らはこゝで新しく解放さ
 れた感覺を以て即時代的、即社會的、觀察を深め、そこに今まで嘗て見
 なかつた種類の不可思議な輕蔑の文學を創造しようとした。これは或は
 彼らが豫期したコースであつたかも知れないが、事實現代の如き重壓の
 時代に於て、この文學の他に彼らに残されたどんなものが考へられるで
 あらうか¹⁵。

“不可思議な輕蔑の文學”とは、“現代の如き重壓の時代に於て”、近藤東の
 ことばを借りれば、“現實の強烈さに抵抗する姿勢”としての“諷刺的方法”、
 さらには、“作者の意見は、意見として作品の中から姿を消す”という“戰

術”¹⁶による文学、といえよう。

村野の回顧をひきつぎながら、『文藝汎論』1938年新年1月号の「詩壇時評」で、木下常太郎は“進歩的な詩雑誌”を代表する『新領土』と『VOU』を採りあげる。木下は村野のいうように『新領土』が必ずしも新しい地平を開拓したとは考えない。“たゞ一時「二十世紀」によつてみた革新的な分子がこの雑誌に合流したことが幾分調子を變へたやうな印象を興へた”が、基本的には、“今でも「新領土」の編輯法は「詩と詩論」のそれと革新的な相異がない”¹⁷のである。

詩風は「詩法」時代に出来上つた類のものが支配的である。この詩風はどこかスタイン風のほひのするものである。この傾向が強く現れるときは非常に原始的なオートマチックな美しい白痴性を帯びる。近頃はこの傾向に幾分サタイアが加味されてゐる。近藤、春山二氏の作品がその代表的のものである。この傾向にはまりこんでゐないのは村野、永田、楠田の三氏位のものである¹⁸。

木下は“有名な反萩原派”たる“長老格の春山氏”にきびしい。“吾々は他人との喧嘩からはレトリックを作り、自己との喧嘩から詩を作る”¹⁹べきだと考える彼は、各所での萩原朔太郎への執拗な攻撃にもかかわらず、春山には新しい詩の領土が拓けていない、と考えるのだ。ただし、村野はその詩風において注目される詩人であった。“「新領土」にゐながらその悪い方の傾向に食はれずにオリジナルな仕事をしてゐるのは村野四郎氏一人ではないかと思はれる”²⁰と。

この『文藝汎論』1月号の巻頭におかれたのが、村野の「近代修身」であった。翌月号の「詩壇時評」に、木下はいう。ここに、現代を“直面し直觀せんとしてゐる”²¹詩人がある、と。

忍従のアスファルトの下に
ふるき球根をゆめみることなかれ

これが“政治及經濟の異常に緊張した國際情勢”における“即時代的、即社會的、觀察”から導かれた、村野の“不可思議な輕蔑の文學”の骨格である。

『文藝汎論』は、その奥付にもかかわらず、当該号は前月の中旬に発売²²されていたから、12月号の発売は11月中旬となる。したがって、ここに掲載された村野の詩壇回顧が執筆されたのは、遅くとも10月の下旬までと考えられる。村野は、まだ、ふた月を残しながらこの年を総括したのである。しかしながら、それを「平和的な印象記」と題したことは興味深い。“文學者などの地味な仕事は片隅に押しつめられた形であつた”ゆえに“平和的”と呼ぶことはできよう。だが、彼は、“異常なニユースの氾濫”がけっして“平和的”であるとは考えていない。標題は、まさに、村野のいう“輕蔑の文學”の立場、サタイア、あるいは、逆説の文學的表現であつた。と同時に、その逆説的な言説は、異常な状況を平和的と呼ぶことによって、状況を、村野のことばでいえば、即時代的に承認することにもなる危険を孕んでいた。“この文學の他に彼らに残された”ものがなかったとしても。

文字どおり即時代的な作品、戦争詩は、すでに書かれていた。“昭和十二・十・一作”と付記された福田君夫の「國民精神總動員の歌」はその一例である。発表されたのは、『日本詩壇』の1月号である。

神代ながらの 日の本を
 治め給へる 大君に
 仕へまつるは 一億の
 忠義に燃ゆる 民なるぞ。

つづいて、以下4連まで。

我等が首相 壇上より
 叫びし聲に 全國は
 官民擧りて 非常時の
 國民精神 總動員。

銃後を護る 国防の
 婦人も起てり 街頭に
 義金を募る 愛國の
 心は堅し 嚴^{いわ}よりも。

空の守りに 少年も
 航空隊に 加はりて
 単身長軀 爆撃に
 残す勳功は 永久^{とこしへ}に。

“少年”たちの飛行機は、もはや即物的な機能ではなく、その行動に目的が与えられていた。もちろん、詩人は、村野のいう“日に報導される夥しい同胞の死”を歌い込むことを忘れてはいない。第5連である。

天皇陛下 萬歳と
 聲張り上げて 戦線に
 玉とくだける 将卒の
 立てし譽の 日章旗²³。

このような“戦争詩”が書かれる時代は、詩人にその役割はなにか、と問いかけていた。『蠟人形』が新年1月号の「アンケート」で、「今回の戦争に際して、所謂戦争詩は我國に興起するや、否や？」²⁴と問いかけたのも、ゆえなしとしない。

村野は、こう答えている。

戦争詩は興起しないとおもひます。大體、戦場の經驗を持ちうるやうな現代詩人が何人居るでせうか。觀念的な素材としての戦争などは現代の詩人にとって何ら特別の價値とはならないでせうから。

春山にとって戦争とは、旧来の詩との戦いを意味していた。

現在の複雑な文化状態ではオリジナルな戦争詩は起り得ない。戦争詩は十九世紀までの伝統です。(略)しかし、戦争詩に代るものが起きる可能性はあるといへます。古い昔の習慣を進化させる⁽²⁴⁾ものが戦争の本質ですから。

『新領土』の編集にあっていた上田は、一行で答えた。

戦争詩は興起しないでせう。社会的な寛大さがこれを培つてゐないから。

語り口は用心深くかつ大胆である。戦争詩の契機となる戦争を認めるほど、現下の社会は寛大ではない、ということは、社会は戦争を求めている、と同義である。

しかしながら、国家総動員が提唱されるなか、社会の一般は、“日々に報導される夥しい同胞の死や、政治及経済の異常に緊張した国際情勢”のなかで事変後の進展に一喜一憂していた。戦争詩があれば、そこで精神の解放が果たされるであろう。それを歌いあげるひとつの例が「国民精神総動員の歌」であった。

時局は急速に展開していた。12月13日、中国国民政府の首都南京が陥落する。翌日、14日夜、そこで行われつつあったことを知らぬまま、全国各地は提灯行列に湧いた²⁵のであった。これらの「アンケート」の回答が書かれたのはいつであろうか。『蠟人形』新年1月号が奥付どおりに発売されていたとすれば、遅くとも、12月の中旬までには編輯者の手許に届いていなければならぬまい。南京陥落の前か後か、それは微妙である。

ただし、その12月13日、春山は『セルパン』1月号の「編輯者の言葉」を書いていた。

けさ、南京が完全に陥落したとの報があつた。一九三七年の暮はこの快報によつてとざされ、つづいて日本の将来の大きな轉機となるべき新

しい年を迎えるにあたり、はるかに精英なる皇軍の武運と、戦野に逝ける英霊の瞑福とを祈り、併せて本誌執筆者並びに愛読者の前途幸多からんことを祈る²⁶。

型どおりの新年号挨拶であって、南京陥落が春山にとって“快報”であったか否かは不明である。しかしながら、それは「愛國行進曲」を迎える背景であった。

つづいて、春山は筆を進める。“近頃、大學教授がものを書くことをおそれだしたことが、なんだか特別に目立つやうな気がする”²⁷と。すでに、この月1日、矢内原忠雄は大学辞職を余儀なくされていた。発端は、『中央公論』9月号の「國家の理想」が事変を批判したとの理由であった。さらに、春山が「編輯者の言葉」を書いた翌々日、第一次人民戦線事件で検挙された者は400名をこえた。年が明けて2月1日、大内兵衛、美濃部亮吉ら38名が検挙される。いわゆる第二次人民戦線事件である。大学関係者にとどまらない。同月、石川達三の「生きてゐる兵隊」を掲載した『中央公論』が発禁となる。春山の観察は、『新領土』に鮎川信夫が加盟するころ、知識人文芸人たちを包囲する環境を先取りしていたのだ。

1937年に戻らねばならない。村野はその「平和的な印象記」の末尾に、“詩壇に於ける二つの俱樂部、東京詩人俱樂部と日本詩人会”に言及する。東京詩人俱樂部は“責任者、岩佐東一郎、村野四郎、長田恒雄、近藤東、北園克衛、田中令三、山本和夫”によつて運営され、刊行にはいたらなかったが、“二十数名の自作英詩數十篇を編纂し既に印刷に附した”と、その活動を記し、このことは、“楽しく自作朗読會を催し、賞品を採興したりした”日本詩人会とは“既に趣味に於て異なる所以を示した”²⁸のものであると村野はいう。東京詩人俱樂部が、運営にあたった詩人たちの顔ぶれから、木下が“進歩的な詩雑誌”と呼ぶ『VOU』や『新領土』系詩人たちの集まりであったことがわかる。他方、日本詩人会は、もちろん、旧詩人たちの拠点であった。この年、村野は、翌年10月に東京詩人俱樂部が「戦争詩の夕」を主宰すること、またさらに、1940年秋、“新体制”のもと、彼自身が、日本詩人会の詩人たちとともに「日本詩人協会」結成に関与²⁹することになるとは、も

ちろん知らない。その意味でも、彼にとっては、“平和的”な年であった。

「平和的な印象記」の冒頭の、空白にされた三文字は何か。『新領土』が“毎月夥しい海外文學の紹介と作品によつて”呼びかけた、その“青年達”であったらうか。

今年も遂にバンザイ、バンザイといふ悲痛な聲と、あはたゞしい青年達の出征の旗の中に終らうとしてゐる。

いずれにせよ、三文字は紙型から削りとられたのである。時局、さらには、非常時にあって、一般的な詩誌も検閲を意識しなければならぬ季節になっていたのだ。

5. 1938年の希望 モダニストの誕生

本名、上村隆一。1920年8月23日生まれ。『新領土』創刊のころ、1937年4月、彼は早稲田中学を4年で終了し早稲田第一高等学院に入学した。17歳。三木清のこぼれを覚えていけば、“日支事変後の学生”³⁰であった。

青年詩人鮎川信夫の誕生にいたる経緯は、こうである。

中学一年の頃、私は生田春月の詩が好きで、もっぱら春月ばかり読んで、その感傷性におぼれていた、中学二年で萩原朔太郎の詩集を手にし、衝撃を受けた。詩的な官能美の世界をはじめて知ったとっていい。すぐに真似をして詩を書きはじめた³¹。

萩原の詩集は“橙色した新潮文庫の薄い一冊”で、彼は“三日に一つぐらいのわりあいだで朔太郎ばりの詩を書き、朔太郎のような詩人になりたいと祈念した”³²という。生田春月の詩はすでにこの新潮文庫で読むことができたから、そのつながりで朔太郎に行きついたのであろうか。しかし、

やがて、西脇の詩に接して、それまでに知っていた詩の世界とは、全く別種の詩の世界にふれるオドロキを味わったのである。まだ若かった

から、もちろん、西脇の詩の世界がすっかり分ったとは言い難い。ただ、それまでに見知っていたウエットな日本的感性の詩とはちがった、明るい、エキゾチックな感覚の詩の美しさに魅了された³³。

鮎川は、“中学三年の頃だったと思う”と記す。別の回想によれば、出会いは、西脇順三郎の『Ambarvalia』という赤い表紙の豪華本詩集³⁴であった。

前後して、『詩と詩論』に出会う。その“第何冊目であったか、それは忘れたが、とにかく古本屋で一冊見つけて買って来た”鮎川は、“詩も評論も、難かしくてよく分らなかった”が“萩原朔太郎をやめて、たちまちこちらに転向してしまった³⁵”のである。別の回想では、この詩誌を“中学三年のときに古本屋で数冊買った³⁶”とも記している。買ったのは“一冊”なのか“数冊”なのか曖昧である。回想はたえず揺れるものであるが、学年についても同様である。さらにほかの回想では、“『詩と詩論』を何冊かまとめて買ったのは、大久保駅近くの古本屋で、中学二年の終わり頃³⁷であったとされる。

牟礼慶子によって、新潮文庫版現代詩人全集14『萩原朔太郎集』の刊行は1936年4月10日であったことが確認³⁸されている。したがって、朔太郎との出会いは、16歳になる年、正確には中学4年生になったころであり、季節はなお戒厳令下にあった。2・26事件³⁹による東京市の戒厳令が解かれたのは、ベルリンオリンピックが開催される前日、7月31日のことである。西脇の詩集と『詩と詩論』との出会いは、この前後、おそらくは、さらに後のことであろう。モダニズムとの最初の出会いは、オーデンのあの飛行士が真実の祖先を見いだしたという、“十六才の半ば⁴⁰”ではなかったか。

別の回想によれば、“最初に書いた詩”は、“滝口修造そっくり”のもので、“誰が読んでも全然わからなかった”ような詩であった。“友人に見せたら、こりゃ何だの大騒ぎになった”と。鮎川は“中学三年の始め頃書いた⁴¹”というけれども、それは、『詩と詩論』で滝口の作品に接してからのことであり、何らかの詩誌に投稿しようと考えはじめたころのことであろう。彼が『詩と詩論』をとおして滝口を知ったとすれば、それが何冊目であったかを推測できる⁴²が、より重要なのは、鮎川が、『詩と詩論』によって、モダニ

ズム、当時のことばでいえば“シュルレアリスム”の存在を知ったということである。しかし、出会いが衝撃的であったことは事実としても、その“詩も評論も、難かしくてよく分らなかった”というのが本当のところであろう。

さらに、鮎川は、詩誌に投稿するようになって書いた詩は“載るようになって書いたから載りやすくなっている”⁴³という。投稿詩人に開かれた詩誌の選者が既成詩壇に属していたことは認めねばならぬ。ただし、詩壇への戦略をほのめかす回想は、のちのモダニストの立場が反映されているので、話半分に聞かねばならない。むしろ、朔太郎から西脇などのモダニストの詩を経由した、モダニスト風の抒情詩がそのまま受け入れられたと考えたほうがいい。

1937年、『若草』9月号に、佐藤惣之助に選ばれて、「寒帯」⁴⁴が佳作となる。このときの筆名によって詩人鮎川信夫が誕生したのである。北村太郎が覚えている“銅色の月”ということばがあった作品⁴⁵は、その11月号に掲載された「黄昏」である。佳作ではなく入選であった。この年、鮎川は神戸高商在学中の中桐雅夫が出していた同人誌『LUNA』⁴⁶のメンバーとなる。『若草』などで中桐とその詩誌の存在を知り、連絡がはじまったのである。“見本誌を送れ”と申込むと、ガリ版の四角い詩誌を三、四冊送ってきて、七輯から活版にするから汝も加盟せよといった主旨の手紙が添えてあった。”1937年の“夏の終り頃”⁴⁷のことであり、入会は9月⁴⁸であった。11月、活版の『LUNA』第7輯に、もうひとつの「黄昏」が⁴⁹登場する。時は、すでに、長田恒雄のいう“へんちくりんな季節”であった。

鮎川は若い世代の『LUNA』に寄稿しつつ、村野のいう“一般的詩誌”⁵⁰にも投稿をつづけていた。1938年、岩佐東一郎と城左門が主宰する『文藝汎論』2月号の「新鋭作家特輯」に、「漂泊者の哀歌」⁵¹が採用される。同月号の『日本詩壇』には、「落葉」が掲載⁵²される。さらに、『蠟人形』の同月号の「二月讀者作品號推薦十五人集」には、「逃亡」⁵³が西條八十に選ばれる。これらは、前年末までに書かれた⁵⁴ものであるが、鮎川は、無名ながら投稿詩人としての力量を認められつつあった。注目すべきは、“讀者作品號”を予告した前年12月号の『蠟人形』が、「二つの抗議と主張」⁵⁵を掲載し、ここで、近藤東と北園克衛が『新領土』と『VOU』の立場をそれぞれ論じてい

ることである。鮎川は木下のいう“進歩的な詩雑誌”の立脚点を知っていたのである。

鮎川の「日記」によれば、この2月6日、彼は『新領土』のために「遊園地区」を送り、8日に会費を払う⁵⁶。彼は、年輩詩人たちの主宰する『新領土』の同人となったのである。18歳となるまえ、数え歳で19歳であった。同月、2月14日、『文藝汎論』3月号で木下常太郎が「詩壇批評」に「漂泊者の哀歌」をとりあげたのを読み、日記に記す。“キーツ風な素直な表現であり、佳作である。と評された。親切な批評であり有難いけれど、も早や僕の詩がここから更に変化してしまった現在、少しくすぐったいものであった”と。しかしながら、鮎川は『LUNA』に属しつつ、伊原隆夫の名で『若草』に“ファンタジックな抒情詩”⁵⁷の投稿をつづけていた。それが、1月号の「靴」⁵⁸であり、この号から選者となった堀口大學に賞賛された。3月号「船」、5月号「霜咲く日」とつづく。最後と思われるものは、6月号の「シャボン玉」である。書かれたのは、『新領土』入会のおち、4月であったと想定⁵⁹される。

『文藝汎論』はアンケート項目を定めた投稿欄「各人各説」を設けていた。1938年3月号の項目は、新年號の讀後感 と＜一九三八年の希望＞である。『文藝汎論』は当該月よりはやく前月の中旬に発売⁶⁰されていた。したがって、この3月号の＜新年號の讀後感＞は、前年12月中旬に発売された新年号の讀後感であり、＜一九三八年の希望＞は1月の前後に書かれた一種の年頭所感である。

＜新年號の讀後感＞に、鮎川は答えて記す、“本誌のおかげで新年を楽しく過ごさせていただきました。村野、岩佐、北園、近藤、高祖の諸氏の詩が殊に好かつたやうに思われます”⁶¹と。名前は掲載順であって必ずしも好感度順ではないが、いずれも『新領土』『VOU』の同人あるいは近しい詩人たちである。作品の質はともかく、堀口⁶²、田中冬二、竹中郁、菱山修三らが入っていないことは鮎川の選択の基準を反映しているかもしれない。注目すべきは、『新領土』以前に、鮎川が村野四郎の連作「近代修身」を“一般的詩誌”でこの頃読んでいたことだ。この『文藝汎論』新年号の最初の頁をかざったのは、木下常太郎が「詩壇時評」で採りあげた、“ニツケルの雲がみる／體育館の道をゆけ”にはじまる「近代修身」⁶³であり、同時に、もうひ

とつ、『日本詩壇』の「新年特輯號」，“太陽は見なれた果物である”とはじまり“ラヂオ體操”を歌い込んだ「近代修身」⁶⁴である。後者については、翌月号に鮎川の投稿詩「落葉」が掲載されており、鮎川がふたつの作品を前後して読んでいたことは疑いえない。また、3月2日、彼の最初の作品「遊園地區」を掲載した『新領土』3月号を手にした鮎川が読んだのは、スキー場を歌った「近代修身」であった。さらに、『蝸人形』では、5月号で、村野の「近代修身 田園考」⁶⁵を読むことができる。鮎川にとって村野は連作「近代修身」の詩人であったのだ。

<一九三八年の希望>では、たとえば、『新領土』の若い同人、池田時雄の回答はこうである。“日本軍の對支行動が所期の發展を遂げるやう、詩に於ける我々の行動が新しいラインを引くことに成功するやう、文藝汎論が發展するやう、個人としてうんといい作品が書けるやう等々……。”⁶⁶ また、“轉向を宣告”⁶⁷をした『VOU』の同人、年輩の山中散生はこう記した。“日本民族精神に立脚した雄大な詩の出現を希望します。なくもがなの詩人は自肅自戒すべし。以上。”⁶⁸ 山中が北園克衛とともに、「世界超現実主義作品展」の日本委員としてその開催・啓蒙に尽力したのは、前年、1937年夏⁶⁹のことであった。世代を異にしつつも二人の詩人の希望は、確実に浸透しつつあった不安を、“見よ東海の空明けて、旭日高く輝けば”と歌う愛國の行進曲に解消したものと読んでもいい。

鮎川はこのように記している。

時期を待つていのものでなく、もつと積極的に「詩壇」が現時の困難な環境を打破することを希望します⁷⁰。

微妙である。“「詩壇」”が打破すべき“困難な環境”とは、村野四郎がいう、新しい詩の出現を阻む“不潔でエクセントリックな世界に居る古い美學”なのか、あるいは、饒正太郎のいう、“改造し、修正”すべき社会的な“環境”なのか判然としない。明らかなことは、好むと好まざるとにかかわらず、鮎川の耳にも「愛國行進曲」が響きわたっていたことだ。

『日本詩壇』2月号に採用された「落葉」は、前年の12月末までに投稿さ

れたと推測される。

凍みついた心はランプをあこがれ
落葉の中をさ迷つた

梢の上月がのぼり風がもつれてゐた
その街角に 見たのだ
重たい黄昏色の外套を着てゐる
どすとえふすきいを
露西亞の寒村のやうに淋しい
その背後の家々

焦点はロシアの作家に結ばれる。しかし、詩人はそれをひらがなとし、傍点をつける。これは、朔太郎が異国のことばを詩のなかに織り込む手法であるが、読者の目をここに惹きつけながら、逆に浮きあがってしまう。しかも、この人物になにを託そうとしたかは、不明である。それは書き手の脳裏にあるドストエフスキーに任されているのだ。

「落葉」は、このように結ばれる。

影へ
またしても鮮血の滴り
赤い落葉であつた⁷¹

“鮮血の滴り”は鮮明である。それは、同時代に共有されていた恐怖であり戦慄であった。しかし、鮎川の眼がとらえた“鮮血の滴り”は“赤い落葉”に収斂される。詩が着地するための技法上の事柄ではない。鮎川の“赤い落葉”は歴史に絡みとられることなく、そのまま現前する⁷²のだ。

『新領土』1月号は好評であった。“直接註文が百二三十部を遙に突破した”と村野は記し、“我々の運動が所期の段階にはいつてきてゐることは事實である”⁷³と、自負する。『新領土』は、基本的には、まだ、日本民族精神とは

無縁であった。たとえば、『セルバン』1月号の「青年の出發」の一行に“青年は太陽と共に政治を忘れるな”⁷⁴と書いた饒正太郎は、『新領土』1月号の特集「現代に於ける詩の意義」に、こう記した。

詩の現代的意義とは少なくとも詩の發展の可能を必要とする。詩の發展の可能は多かれ少なかれ社會機構に制約されてゐる。その意味に於いて詩の現代的意義は議會主義の失業と同時に喪失してゐることになる。萩原朔太郎、乃至三好達治を詩人と考えることは感情の問題であり、文學の歴史の問題ではない⁷⁵。

“議會主義の失業”に対する反応の形はともかく、“古い美學”を代弁する“萩原朔太郎、乃至三好達治”を否定して、詩の“歴史”の“發展”のために新しい詩の領土を拓こうとする立場は、『新領土』に共通していた。

池田は、同じ特集記事に、こう記している。

事變に際し軍歌を書くことのみが詩人の仕事ではないといふ北園の言葉により、さらに文化の各部門の一つとして詩の正當にして進歩するものを民衆の前に示さねばならぬ。この為に未だに存在する前世紀遺物的詩人共に戦ひ彼等の社會に行つてゐる重大なる罪惡をのぞかねばならぬ⁷⁶。

北園の方法は、“歐米諸國に慢延しつつある”情報を“是正”するために、外務省情報部や文化事業部の発行する“歐文パンフレットを挿入して國家に對するVOUクラブの奉仕を實行すること”であつた。池田がそれに共鳴したかどうかはともかく、彼が国内に眼を向けるとき、詩人の使命は“前世紀遺物的詩人共”との戦いに轉換される。“五月に新領土が創刊され春山氏に僕の名前を覺へられたこと”を1937年の思い出⁷⁷とする池田にとって、敵はモダニストを包圍する旧詩人たち、とりわけ萩原であつた。

鮎川は朔太郎の影響と距離について繰り返して語っている。活字になつた最初のものは、おそらく、1938年4月号の「各人各説」のアンケート、<始めて見た詩集>への回答であろう。それは、“萩原朔太郎「月に吠える」だつ

たと思ひますが、はつきりしません”⁷⁸とあるのみである。もちろん、はじめて読んだ詩集が「月に吠える」であったか否かが“はつきり”しないのだが、それにしても、語り口はあまりにもそっけない。

後年、鮎川は“『月に吠える』、『青猫』をはじめて読み、大きな衝撃を受けた”と記す。それは、“十三、四の頃だったと思う”⁷⁹という。しかし、“その影響は、比較的短期間のうちに、あとかたもなく消え去ってしまったように思う”⁸⁰と。もしそうなら、1938年、18歳になろうとする年、鮎川にとっては、いつの頃か“はつきり”しない、と記すことができるだろう。しかしながら、“橙色した新潮文庫の薄い一冊”との衝撃的な出会いが1936年4月以降であったとすれば、そのわずか2年後に、いつ見たかはつきりしない、というのは奇妙である。矛盾を解決するためには、「月に吠える」という詩集をはじめて見たのは、“はつきり”しないが、あらためて新潮文庫版で読み圧倒的な影響を受けたということになる。

ただし、わたしたちの関心は、出会いの正確さや朔太郎の影響の痕跡をこの頃の作品に追うことではない。語り口のそっけなさが肝心なのだ。ひとつには、はじめてその詩と接した時期とあえて距離を置くことによって、自らの年齢を韜晦する戦略であろう。そして、明らかなことは、朔太郎体験との距離のとり方である。『文藝汎論』の4月号は3月に発売されたはずであるから、「漂泊者の哀歌」が掲載された〈二月號の讀後感〉とならぶ〈始めて見た詩集〉への回答は、2月に投函されたのである。すなわち、『新領土』に加盟する1938年2月、詩にたいする意識では、鮎川はこのときすでに“生田春月から萩原朔太郎までの影響をはらい落して、モダニストになっていた”⁸¹のである。

3月7日、『新領土』3月号を受けとった直後、“君の新領土加盟は、その詩風から考へて不審に堪えない”という中桐の手紙がとどく。ひと月のち4月6日、『LUNA』のために書きあげられた「『新領土』加盟についての覺書」は、“『LUNA』を踏み台にされることを極端にいやがった”中桐の“慫慂もあって”書かれた⁸²という。そればかりではない、この「覺書」は、“詩壇”が現時の困難な環境を打破することを希望”した鮎川の意識的な立場の表明であった。

鮎川は、“現代に於いては個人的生活を遙かに超えた社会的政治的な動きが、めまぐるしい迄に廻轉してゐる”とする。したがって、詩にあつても“主題の變遷が見られるのは當然と云はねばならない”⁸³のだ。そのために、鮎川は朔太郎と取り組まねばならない。

萩原朔太郎氏の場合、氏はリリスムに重點を置き、人生に於いて生活の悲哀や苦悶　それがポエジイの本質である　として、自身もそれに従つて詩作して居られる。そして<若さ>とか<新らしさ>には何等の意見もない(「詩人の使命」記憶による記述⁸⁴であり確かではないが)と云はれるのは氏の詩作上の態度から決定された、いはば個人的な主観的な見解であつて、詩の歴史とは何の関係もない⁸⁵。

鮎川は抒情詩をすべて否定するのではない。“抒情主義が、いつまでも單純な個性的な哀歡感情の表現のみに止まつて排斥されるに到つたのは、僕自身から言へば残念であるが、その責任の大部分は過去の抒情詩人が負ふべきであつて、抒情主義(リリスム)の本質的な探求から広く且複雑な範圍に於いて詩的可能性を擴張しなかつたためである。”⁸⁶ そのことは、“詩の歴史とは何の関係もない”のである。鮎川は、はからずも、饒正太郎や、創刊号に“冷酷な時期に直面して”詩の本質と価値とに不斷の批評を向けて、“詩の歴史の絢爛たる開花を求めなければならない”と記した上田保の意識を共有しているのである。

後年の鮎川は、“こんな詩ならオレにも書けそうだぐらいの軽い気持ちで『新領土』に入った”⁸⁷というが、2月27日、おそらくはじめての“「新領土」の会”開催通知を受けとり、“試験最中で行きたくとも行かれない。この次のパーティーの時は是非行って見たい”と記した鮎川は、モダニストたちとの出会いによって詩の新しい領土が拓けることに大きな期待をかけていたのだ。

では、抒情主義を継承しながら“詩的可能性を擴張”する方法はなにか。「『新領土』加盟についての覺書」を書きあげた翌日、4月7日の日記に記すように、“高度の抒情詩はサタイアを含まねばならぬ。單純な個人的哀歡表現

の抒情詩を排斥”すべきである。

何よりも現代の抒情詩は、社会的意識の上に適応する自由な（抒情主義の特質であり近代人の求むるもの）精神を展開させ燃焼させねばならぬ。無反省な本能的な感情表現の世界[で]はなく、主知的な巧緻な機械的作用をもってこそ現代のリリシズムは導かれる。

“個人的生活を遙かに超えた社会的政治的な動きが、めまぐるしい迄に廻轉してゐる” なかにあって、新しい抒情詩を展開するための方法は、サタイアであり、また“生活の悲哀や苦悶”から生まれる“単純な個性的な哀歓感情の表現”あるいは“単純な個人的哀歓表現”を、“主知的な巧緻な機械的作用”によって転換することであった。『新領土』の同人となった鮎川は、先輩のモダニズム詩人たちの方法にそれを見たのであった。

5月7日、『新領土』加盟についての覚書」を書いてからひと月のち、鮎川は日記にメモを記す。その冒頭の一行。

我々は主知の規律を選んで、環境の選択と適応とを発見しようとする。

これは、『新領土』創刊号巻頭で、春山行夫が“少し飛行家に似た風貌”の詩人に語らせた、あの詩論、「抒情詩の本質」⁸⁸である。

村野は『新領土』5月号の「後記」にこう記した。

『新領土』は今月で丁度一ヶ年を経た。そして益々順調だ。僕たちは所期のコースを完了するまでは絶対に僕らの爆音をやめないだらう。僕らは新しい詩を建設するために、つねに古い詩の滅亡を積極的に希望した。これからもその為にはあくまでも戦ふことを辭さない。（一段略）

『新領土』の創刊號から六號までが、少數の合本となつた。海外と日本の詩の動向について、新しい認識を欲する人々は、なるべくお申込みをして頂きたい⁸⁹。

鮎川は、この六冊の合冊本を読みふけていたのだ。創刊号の特輯が「イギリスの新詩人」であった。彼は、「抒情詩の本質」のみならず、オーデンの詩、エリオットを扱ったスペンダーの「詩論 Fragments」、そして、デイ・ルイスの「詩に對する期待」⁹⁰も読んだはずである。

『若草』との関わりは、その4月に投稿された「シャボン玉」が最後となる。抒情詩人伊原隆夫はモダニスト鮎川信夫に解消されたのである。鮎川は、『新領土』の寄稿者としてまた読者として、“海外と日本の詩の動向について、新しい認識”を深めてゆく。

6. ドキュメント 1938年の鮎川信夫

『新領土』に加盟し、詩誌『荒地』の刊行へ向かおうとする1938年、日記に書きとどめられた18歳の鮎川の姿は、時局さらに非常時を背景にして嘗まれた青春を偲ばせる。

2月12日、『モダン・タイムス』を見る。9日に封切りとなった話題作⁹¹である。鮎川はこの年、さまざまな映画の印象を記している。外国映画の輸入禁止措置によってアメリカ映画は激減⁹²するが、「新体制」のもと翌年10月の映画法による規制にいたるまでは、映画もまた、西欧にわずかに開かれた窓であった。

2月24日の日記。

今、日記の天候の項を書かうと外を見たら、ウーウーウーとサイレンが鳴った。防空演習である。今でもまだなり続けてゐる。

鮎川の『新領土』への最初の作品「遊園地區」が登場するのが、その3月号である。3月2日に記す。試験中なのでゆっくり読む時間がないが、“ざっと見渡したところ、村野、近藤、上田、あたりの新領土の代表的詩人の作が流石に立派なものである”と。スキー場での体験を歌った村野の「近代修身」は、同号に掲載されていた。その前半部はつぎのとおり。

この山小屋に来てから一週間になる

僕は新聞紙の襷に觸れないし
 いまとなつては
 樹氷のおとも
 貨幣の音に似てきた。
 諸君はあくまで
 空間の純粹を讃へるが
 はたして耀く連峰の内に
 議事堂の形があつたか。
 君らは飛行機の影を追ひかけ
 スキークラブの君らの旗を
 フッシュ
 藪に奪はれたではないか⁹³。

3月30日、鮎川は『新領土』のパーティーへ行く。“雑談的な会であって面白く一夜を過ごすことが出来た。春山、近藤、村野氏が殆ど喋った”と。春山は、“『新領土』のパーティも、だんだん新しい顔がふへて落着きのある會になつた。なんとなく集つて、それで雰囲氣ができればそれだけで充分である”⁹⁴と記す。

4月1日、饒正太郎のいう“議會主義の失業”のなか、国家総動員法が公布される。6日、「『新領土』加盟についての覺書」を書きあげる。5月、東京市は隣組制度を制定した。その目的は、“交隣相助、共同防衛”⁹⁵であつた。

5月18日、わたしたちは、西脇順三郎の『輪のある世界』を読んでいる鮎川に出会う。

我々の頭は存在する。頭の中に起つたことは存在する。頭の中で作りあげたものは頭の中だけで存在する。(略)この意識の世界は頭を超えては生きられない。キンボウゲはキンボウゲの中だけで生きてゐるやうに、詩的世界は詩的世界以外には存在し得ない⁹⁶。

西脇はその例として、『荒地』の第1部の冒頭50行を、行分けをせず訳出している。

四月は最も残酷な月だ、死んだ土地からライラックの花をうみ出す、記憶と希望をませ合はせる、春の雨に鈍な根をかきまはさせる。冬は我々を暖たかくさせてゐた、忘れる雪の中で地を包み、燥いた球根で小さな生命を養ふ。(以下略)⁹⁷

西脇は、“この詩は餘りよく出来てゐないが、近代の詩の一つのタイプとしてあげた。普通の経験を詩的に結合組合せて作った一つの内面的な世界である”⁹⁸という。ただし、鮎川の反応は不明である。24日、この書からの抜き書きは、むしろ別の章「文學の思想的價值」⁹⁹に関心があったことを暗示している。しかも、同時に、彼は、新即物主義の理論に惹かれていたのである。

同じ24日、鮎川は、武田忠哉『ノイエ・ザハリヒカイト文學論』(建設社、1931年8月)を読みながら、“新即物主義の長い詩を書くのは来年からである”と記す。新即物主義に惹かれつつ、彼は、それを超えようとする。5月29日の日記。“新即物主義の対象は文明である。文明！文明！文明。建築美、汽船、飛行機、機械のエンジン。”しかし、

機械を歌ふことが今日の詩の如く考へるのは愚なことである。機械を追ふことのナンセンスはパストラルな田園風景を鶯のやうに歌うのと同じやうに時代後れである。

我々は根柢となるべき文化を擁護して起たねばならぬ。忘れてゐたヒューマニテイを取戻し、はっきり文化的な位置と歴史的判断によって、その上で機械を書くのがよいであらう。

村野の連作「近代修身」の詩法は、武田たちがいう、新即物主義であった。このころ、鮎川は「田園の祭禮」の構想¹⁰⁰をえる。

6月9日、文部省は「集団的勤労作業運動実施に関する件」を通牒し、勤労働員が始まる。11日、戦線は漢口作戦開始へと展開する。

その6月、28日付で、河合榮治郎が編纂する「學生叢書」シリーズに『學生と社會』が加わった。河合の「序文」によれば、“學生諸君が暑中休暇の

閑寂の時に、或は山間に或は海邊に於て、本書を味讀されんことを切望”¹⁰¹するものであった。

阿部能成の「社會と個人」について、恒藤恭は「社會における學生の地位」を論じた。恒藤が見る“日支事変以後の學生”の姿はこうである。

左翼學生運動の盛んに行はれた頃には、これに對抗して極右的學生運動も相當に活潑に行はれたが、前者が衰退すると共に、後者も活氣をうしなつた觀があり、現在では、學國一致の戰時體制の下における國民精神總動員の方向に沿つて、學生大衆は沈着な歩調をもつて前進してゐる、といひ得るであらう¹⁰²。

學生はいま社會の何処に立っているか。恒藤は「結語」に答える、“今次の事變の發生以前とおなじ處に立つてゐる。ただし戰時にふさはしい心構へをもつて銃後の國民としての課題を遂行すべき責任を負ひながら”と。“全國民が祖國に課せられた東洋平和確保の使命の達成をめざして懸命の努力を為しつつある現在”において、學生の責務は大きい。“日本の國家が現に當面してゐる未曾有の重大時局は如何なる諸要因にもとづいて到來したものであるか、それは如何なる内容、如何なる経過において展開しつつあるか”ということについて、また、“世界史の發展の現段階において、わが國は如何なる独自の使命を達成しようとするものであるか”ということについて、“研究と思索とを怠ることなく、常に學問的見地から明確なる理解を獲得することに努力”することが必要である。そして、學生は、

國民精神總動員の提唱の趣意を充分に體得することにつとめ、誠實と熱意とをもつてこれに参加し、學校内においても、學校外においても、全國民と態度を一にして銃後の國民にあたへられた日常の課題を實行しなければならぬ。とりわけ最近提唱され、立案されつつある集團の勞働奉仕作業のごときものに對しては、欣んで参加し、公共のために盡くす勞働のたうとさを體驗すべきである。

7月15日、1940年に予定されていた、第12回オリンピック東京大会と紀元2600年記念行事の一つ東京万国博覧会計画の中止が、閣議決定される。8月、内閣情報部は菊池寛、久米正雄らを招いて“ペンの戦士”を漢口の最前線へ送る計画を発表、ただちに22名を決定した。翌月11日、従軍作家陸軍部隊が漢口へ向けて東京駅を出発、14日、従軍作家海軍部隊も羽田から大陸へ出発。これらの部隊に詩人では、佐藤春夫、西條八十、佐藤惣之助¹⁰³らがあった。そして、この夏の「ラヂオ体操の會」の延べ参加者数は、いわゆる時局下の「国民精神総動員運動」の一貫として奨励され、さらに三千万以上が加わり、一億五千万人をこえた¹⁰⁴。そして、上田保訳による『荒地』の第1部「死者の埋葬」¹⁰⁵が登場したのが、この夏、8月である。

「死者の埋葬」に出会う直前、鮎川は、神戸大洪水直前に中桐から送られてきた、西脇順三郎の詩論に没頭していた。7月28日に記す。“『超現実主義詩論』を我々は利用すべきである。日本に現はれた最もすぐれた詩論である”と。一方、翌日、“詩によってのみ現在の社会経済組織に対する不満を高唱し得る、”とシュルレアリスムを語る丹羽哲夫のエッセイを読み、“この位の気魄は現在の詩壇には絶対に必要である”と記す。

『超現実主義詩論』(1929年)には『荒地』の第4部、12行からなる「水死」が訳出されていたが、西脇はこれを“人の冬眠の理智を一旦驚かし、それをめざましてそれからそこにある美しい現實に注意を拂は”せる“おどかし”の例¹⁰⁶とした。西脇の超現実主義の立場は“詩的世界”に限定されていた。ただし、丹羽につづいて春山訳『フランス現代文學の思想的對立』(第一書房、1937年8月)をもあわせ読み、アンドレ・ブルトンのシュルレアリスムを知った鮎川が、その社会に関わろうとする“気魄”に惹かれたことも事実である。

この7月28日、『LUNA』を改題した『LE BAL』第15輯がとどく。羽生豊訳のT・S・エリオット「現代教育と古典」が巻頭におかれていた。同号、“6, 20, 38”と日付をつけた鮎川の「ギリシヤの日傘」は、標題からも西脇の影響は明らかだが、非常時と無縁ではありえなかった。その三行。

パルテノン丘にある

ミルクの雲をかきまぜると
その中に澤山の兵士たちの顔がゐた¹⁰⁷

『LE BAL』がとどいたこの日、鮎川は『セルパン』8月号の室伏高信と阿部知二の書き物¹⁰⁸を読み、日記に記す。

学生は知識階級を切実に代辯し、反映する。学生の無力は背後にある知識階級の無力を雄弁に物語るものである。今日では知識階級は社会に対する、その智的指導原理を完全に喪失してゐる。これを奪ったのは他の時代的な動的な力である。そのダイナミックな車輛は遂に支那戦線へと猛進してゐる。インテリはかかる時代に、そのレーゾン・デエトルを如何なる点に見出さうかと血眼になってさがしてゐるのである。

8月5日の日記。“ 昨晚、「新領土の会」に出席。15名程集まった。滝口修造氏が珍らしく見えた。春山・村野・近藤氏は相変わらず ” と。この会の雰囲気は不明だが、日記にはこう記されている。

女性的で弱々しく感ぜられる現在詩壇の迷妄を破って「新領土」などが大いに革新の旗を挙ぐべき時ではないだらうか。「新領土」は対社会に於ける場合についてもっと研究すべきである。

頭にカビの生えた老モウの詩壇人を相手に戦っても大して効果は挙がるまい。春山対萩原の場合に於いてもさうであるが。

同じ5日。“ 灯火管制でネオン、及び少数の街灯が消された。ロシヤの飛行機が飛んでくるかも知れないとのこと。気象通報で気圧の放送はしなくなったさうである。案外今年中にロシヤと戦争が開始されるかも知れない。” 「新領土の会」が開催されているころ、張鼓峰という“領土”を占領した日本に対してソ連軍が反撃したのである。

8月20日、堀口大學訳アンドレ・ジイドの『ソヴェト紀行修正』が、「戦事體制版」として一万部印刷され、翌月、三千部が増刷される。これは、前年

1937年、『セルパン』10月号に掲載され、同月、ただちに単行本として刊行されていた。このとき、この書を読むことは“人類文化全般の為に、又特に近き関係を有する我が日本の為に、ソヴェトの眞實を知ることが、我等知識人の義務だ”¹⁰⁹とされた。だが、いまや、

ソ満國境事件以來日ソ關係は一層深刻化した!! 全日本の焦點はソヴェトの軍備に集中されてゐるが肝要なのはソヴェトの國民が現在どんな生活に置かれてゐるかといふ事だ。ソヴェトは資源や軍備に於て超然たり得るだらう。だがその最大の弱點は國民生活の現實だ¹¹⁰

とされる。文学者の仕事はまさに時宜にかなった効用を与えられたのである。

9月6日。“今日で灯火管制の防空演習も終りである。読書するにも何かと不自由であったが、明日からは楽になるといふものだ”と。防空演習も隣組が受け持っていたのである。

夏休みが明ける。9月24日の日記に鮎川は記す。“昨日、午後4時半頃家へ帰って来た。野営中は、教練をしてゐる時以外は、すべて愉快であった。”

「近代修身」の詩人も、同じ秋を迎えていた。10月の『新領土』に、村野は記す。

防空演習でまつくらだ。黒い覆ひの下で詩を書き乍ら、コホロギを聞いてみると、世にも不思議な氣持になつてくる。灯下まさに親しむべし¹¹¹。

ヨーロッパでは、9月26日、ミュンヘン会談によって、夏以来の危機は避けられたかに見えた。室伏は、『セルパン』11月号で、このように分析した。

チエツコ問題はその最後の關頭において、戰爭に訴へる代りに、政治に訴へた。數萬の飛行機が全歐の大都市を相互に爆撃しあふ代りに、四臺の飛行機がミュンヘンに會合した。かくして全歐が戰爭の慘禍から救はれ、また全世界が血を見ずしてすんだのである。これを政治の勝利と呼ぶもよく、また知性の勝利と呼ぶもいい¹¹²。

ただし、室伏は、“ヨオロッパに、もしも第二次世界大戦が勃發したとしたなら、少くともその中心地帯は、一個の廢墟化するものと考へられなければならない”とも記した。これがイギリスのニュー・カントリー派の詩人たちがおかれた状況であった。ドイツにたいするチェンバレンの政治的解決、いわゆる宥和政策¹¹³はエリオットに衝撃を与える。

村野が“コホロギを聞いてみると、世にも不思議な氣持”になる、と書いた同じ10月号『新領土』に、東京市内で開催される「傷病戦士に捧げる詩の夕」が予告¹¹⁴される。主宰する“東京詩人クラブ”のもとに名前を連ねているのは、江間章子、大島博光、近藤東、小林善雄、酒井正平、永田助太郎、村野四郎。この企画は、“傷兵保護院も亦これを支援する”ことになっていた。

10月26日、「傷病戦士におくる詩の夕べ」が開催される。主催者のひとりであった近藤は、“嚴密な檢閲（これは當方から特に依頼した）と自肅のために、幾分モノトナスになつて本質的には不満であつただらうが、むしろ已むを得ない”としながらも、“可成り成功であつた”¹¹⁵と総括する。鮎川は、『LE BAL』11月号にこう記す。

⁽³⁷⁾九月二十六日夜、蚕糸会館で催された戦争詩の夕べに、三輪白石の両君と出かけた。一般に無味乾燥な朗読が多く退屈極まるものであった。恐らく、この戦争詩の夕べに対して期待して来たであらう異なる二種の観客層のいづれをも失望させたのではないだらうか¹¹⁶。

村野は、これを「傷兵に贈る戦争詩の夕」¹¹⁷と記録した。鮎川は、「戦争詩の夕べ」として記憶し、後年も、それを忘れることはなかった¹¹⁸。

10月、河合の著作4点が、発売禁止とされる。瀧川事件につぐ、河合事件¹¹⁹の発端である。11月3日、東亜新秩序建設の声明が出される。これは南方の領土拡大を追認するものであった。7日、国民精神作興週間がはじまる。

11月4日、鮎川たちは、同人雑誌を刊行するための細目を語りあう。“題名は20世紀が一番良からうといふことになった”が、すでに『20世紀』があっ

たことに気づく。17日、『20世紀』を読み、鮎川は記す。“仲々面白い。量質ともに詩誌として非常に秀れた内容を持ってゐる”と。彼らの詩誌は、『荒地』と名づけられることになる。

『日本詩壇』12月号に、村野の「詩壇印象 九三八年度」が登場する。彼はもはや、この年の詩壇を“平和的”と呼べない。

戦争は續いた。強力な統制が生活のあらゆる部門の上に布かれた 詩人達も無意識に身體を固くした。軽工業的な自由詩人のイメージは、この外界によつて流行から外れ相になり、サタイヤは莫迦々々しき企てと化した。人生派の詩人達は、従來の惨しい自己批判から轉回し、外界に向つて勇しく國策的に歌ひ、今まで前衛的であつた純粹派の詩人は、押し潰されたやうに不活發に歌ひ、逆に自分の中へ這入つた。彼らの知性は彼らを憶病にし、彼らに恥恥心を興へ、新しい轉換への勇氣を抑制したのであつた。彼らは冬季の水銀柱のやうに低いところでピカピカした。そして人生派のある種の詩人は、夏季のアルコール寒暖計のやうに赤く奔騰した¹²⁰。

鮎川がいう、「戦争詩の夕べ」に期待して集まった“異れる二種の観客層”とは、この“純粹派”と“人生派”にほかならない。

『文藝汎論』12月号は、「戦争詩の夕べ」の感想をちりばめていた。同号に掲載されたのが、鮎川の「田園の祭禮」である。引用は、第2連以下。

キウリ畑でサイレンが鳴り
大理石の林の都會から
體操着のまま遁走した
君らの機械にアブラがさされた

雲の島からエンジンが響き
透明なプロペラがメガネの中に
陸を超えて飛翔する

より精巧な機械に見とれるときも
 フラスコのうしろでピカピカする
 意地悪な園丁の鋏を怖れなさい¹²¹

村野の詩法の影響は、“機械”の扱いに明かである。しかしながら、同時に、わたしには、村野の連作「近代修身」への反歌のように読めるのである。

村野が歌ったラジオ体操をする“白い^{あばら}肋”の少年たち¹²²は、もはや鮎川の“遊園地区”に遊ぶことはならず、“サイレン”の音に、運動場から“體操着のまま遁走”するのだ。かれらは、身を修めることができない。上空の飛行機は“報國女學生號”¹²³などの名前をつけず、ひたすら“より精巧な機械”として飛翔する。それに見とれるときも、少年たちはもうひとつの機械たる“ピカピカする／意地悪な園丁の鋏”を忘れることができないのだ。“ピカピカ”するのは、村野によれば、“冬季の水銀柱のやうに低いところ”でかろうじて保たれた詩の領土であった。しかし、“耀く連峰の内に／議事堂の形”は、ない。“飛行機の影”によって、拓かれるはずの新領土の“旗を^{フッシュ}數に奪はれた”のは、詩人たちである。底を割ってみれば、それが事実である。現実のまえに、まさしく、村野の“サタイヤは莫逆々々しき企て”と化そうとしていたのである。だが、鮎川の目がとらえるのは、“ピカピカ”するものに包囲された領土そのものである。それは、のちのことばでいえば、“困繞地”の風景である。

村野自身、この年の連作「近代修身」をふり返って、“古い詩人のスタイルを輕蔑したに過ぎず、新しい進展を示さなかつた”¹²⁴と記す。ただし、『20世紀』から『新領土』に合流した酒井正平は、村野の“サタイヤ”の仕掛けをこのように分析した。

對象を一つの所作によつて撻つ世界なのだが、言つてる世界が一つの所作によつて撻たれる様にも見られ易いことが此の種の擲諭の限度の弱點である。そして、此の限度は、言はうとする外的な世界によつて、不遇にも縛められてる事は言ふまでもない¹²⁵。

“輕蔑”あるいは“擲揄”の対象となるのは、村野にとっては“古い詩人のスタイル”である。新しい“不可思議な輕蔑の文學”は“即時的、即社會的、觀察”によって生まれる。しかし、詩人は、それにとどまらず、“外的な世界”に縛られているのだ。酒井のまわりくどい議論は、要するに、連作「近代修身」は社会あるいは政治を擲揄するが、觀察する詩人の“所作”すなわち自らの立場が明確でないために、それに取り込まれている、ということだ。

鮎川の12月8日の日記、“ブルトンの超現実主義は人間解放といふ点に於てヒューマニズムと一致する”と。ただし、その28日に記す。“夕方。悵鬱だった。不安は嫌である。”

年が明ける。1939年1月27日。“「三田文学」(二月号)村野、長田の詩はつまらない。”「近代修身」のあとの、村野の「眞冬賦」はこうである。

古い雲は
 枝々の網の中に沈み
 ギザギザの縁^ゝある
 遠のく事物の環^わに中に
 僕は針葉樹と共に残された
 僕はにぶい光線の中で瞑目する
 僕は 僕から出發する道があることを知る
 あたりに散りしく
 時間をふんでゆく彼方に
 収縮する筋肉
 ああ 鐵亞鈴

純白なタイルの眞冬が見える¹²⁶

ここにあるのは、“外的な世界によつて、不遇にも縛め”られた世界である。この世界は、鮎川が萩原に指摘した“人生の悲哀や苦悶”が陥りやすい詠嘆を削りとの詩法によってできあがっている。残るのは、“にぶい光線”に照

らされた荒涼とした抒情である。“サタイヤ”はない。まさに、“サタイヤは莫迦々々しき企てと化した”のである。しかしながら、詩の焦点は、“収縮する筋肉”がにぎる“鐵亞鈴”に結ばれる。その一瞬、“眞冬”の風景は、感情をもたぬ無機質な“純白なタイル”の輝きを示すのだ。残余の抒情をなおも削るならば、“悲哀や苦悶”とは無縁の“筋肉”の世界が残るであろう。これはまさに、村野にとって新たに“出發する道”すなわち、のちの『體操詩集』の方法であった。

鮎川の、同日の日記。

頭髪を切ってしまうやうに云はれた。伸ばさうとしたんだけど、仕方がない。一つの性格の象徴を見るやうな気がした。何も思ふまい、云ふまい。

“日記もうっかり書けない時代”であった。鮎川には、“僕から出發する道があることを知る”とは書けないのである。

しかしながら、『新領土』が重要な役割を演じたことを見逃してはならない。村野は、「詩壇印象 九三八年度」に記している。

新しい外國詩文學の紹介に於ては、その殆ど凡てを「新領土」がこれ果したと言つていゝ。こゝに集中された外國文學者のスタッフは見事なものであり、これが詩壇に與へた影響も、目立たないが大きかつたと言はねばならない¹²⁷。

そのとおりである。鮎川にとっても、『新領土』は新しい外國の詩へ開かれた窓であった。

7. 『荒地』の登場 エリオットを読む

1938年、福原麟太郎は、『英語青年』9月1日号の「片々録」に、こう記した。

「新領土」といふ雑誌がある。もう三巻十五號になつてゐる。(小略)元來、詩の雑誌であらうが、いつも半分以上、殆ど常に英國の新しい文學思潮を翻譯して紹介してゐる。詩論の翻譯などかなり早く載る。新しい批評家達、Michael Roberts、Louis Macniece、Auden などの論がよく出てゐる。春山行夫氏が巻頭にいつも「詩論」なるものを書いてゐる。特色ある雑誌である¹²⁸。

村野四郎はすでに“我々は決してニュー・カントリー派の運動に自身投入するのでもなんでもない”と記したが、福原が見るように、『新領土』は30年代の“英國の新しい文學思潮を翻譯して紹介”することをつづけていた。ただし、このとき彼は、次号8月号に、上田保訳『荒地』が登場したことを知らなかった。オーデン・グループの“祖先”たるT・S・エリオット、その1922年の作品を、若い詩人たちは翻訳で読めるようになったのである。

エリオットの詩の翻訳の登場に関わる回想はさまざまである。北村太郎に衝撃を与えたのは翌年2月号の「風の夜の狂詩」¹²⁹であり、“分からないながら当時読んでいた日本の詩とはまったく異質の詩であることを直感したのは確かだった”と回想する。“萩原朔太郎、三好達治、金子光晴、それに数多くのモダニストたちのどの詩にもエリオットは似ていなかった”¹³⁰のである。田村隆一にとっては、1938年8月に登場したこの『荒地』第1部「死者の埋葬」である。その“(夏は)我々を驚かした”Summer surprised us”という詩句の意味を、7年後、敗戦の“一九四五年八月の夏の光りのなかで、ぼくは、ぼくの個人の名において”再発見¹³¹するのだ。

鮎川にとっては「死者の埋葬」であつた。彼の記憶は、こうである。

私は、そこに何かわれわれの詩とちがうものがあることに気づいたことを、今でもはっきり記憶している。当時の四季派の詩、モダニストの詩、その他の詩などとはまるでちがった、暗くて、皮肉で、思索的なあるものが直観的に感得されたのである。そこには、詩にたいする私の渇の一端をいやす、何ものかがあつたのである¹³²。

これは、戦争体験を経て“個人の名において”獲得されるような激しいエリオット体験ではない。鮎川は、“詩にたいする私の渴の一端をいやす”何かを感得したのである。それは、むしろ、ゆっくりと彼の身体に食い入ることになる出会いであった。しかしながら、翻訳の体験は、北村に似ている。朔太郎など旧詩人はもちろんのこと“数多くのモダニストたち”とも異なる詩を発見したのである。とすれば、モダニズムの拠点たる『新領土』は、自らを否定しうる作品を読者に提供したことになる。

1938年1月号に、岡橋祐は、“階級的対立とか社会的対立”ではなく“対立意識のポエジー”に“詩的興奮”を覚えると書いた。岡橋の詩的興奮はモダニストのものである。もちろん、エリオットに接した若い詩人たちは、岡橋とおなじように、“行き詰まってどうにもならない現代の僕達の心理の或る部分を鮮やかに捉へてゐる”¹³³感があつたことは疑いえない。しかしながら、彼らのエリオット体験は、そのような“心理”より、むしろ、それを生みだした、“行き詰まってどうにもならない”時代の意識のなかで得られたものであつた。鮎川が直観的に感得した“暗くて、皮肉で、思索的なあるもの”は、同時に、時局に包圍されて行き詰まった詩のなかで“渴の一端をいやす、何ものか”でもあつたのだ。

鮎川はエリオットの名前はすでに知っていた。しかしながら、鮎川の最初の作品「遊園地区」を掲載した『新領土』3月号に、岡橋祐訳「ポオル・ヴァレレイの方法」があつた。これは、彼が加盟した直後に会つたエリオットの評論であつたばかりでなく、『新領土』にとつても本格的なエリオットの登場であつた。3月2日の日記に記すように、これは“特輯記事”のひとつであつたのだ。

ヴァレレイの「セルパン」の二行、“永遠に、ノ永遠にその先端を噛む”を引いて、エリオットはこう記していた。

ヴァレレイの詩のすべてのやうに、それは、個人的な情緒、個人的な経験が非個人的な或るものに擴大され完成されてゐるといふ意味に於て個人的な経験や情熱から絶縁された或るものといふ意味に於てではなく、非個人的なのだ。實際、ルウクリシアスの卓越せる點、その驚

異すべき點は、彼が自らを一つの體系の中に消滅させてそれと合一せしめ、かくて彼自身よりも偉大な或るものを獲得してゐるあの情熱的な行為なのだ。

かかる自己抛棄は偉大な集中を必要とする。(以下略)¹³⁴

ヴァレリーの“非個人的”な詩の背後にエリオットが見るのは、モダニストの詩法ではない。“自らを一つの體系の中に消滅させてそれと合一せしめ”る“自己抛棄”の精神であった。ただし、このとき、この硬質な訳が鮎川にどのような反応を起こしたかは不明である。

矢本貞幹訳ティ・エス・エリオット『文藝批評論』が岩波文庫から刊行されたのは、奥付によれば、この年の5月1日であった。この翻訳でエリオットは広い読者層に身近なものになっていた¹³⁵。のちに鮎川はその「傳統と個人の才能」の一節を借用¹³⁶するが、手にしたのはあとのことであろう。

8月に登場した「死者の埋葬」との出会いがどのようなものであったか、これは日記からは確認することができない。しかしながら、ちょうどそのころ、彼は『LUNA』を改題した『LE BAL』の巻頭に掲載された羽生豊訳で、エリオットの「現代教育と古典」を読む。8月15日の日記、“興味深く読んだ。訳もなかなかいい”と。

羽生の訳から、その二行。

二つ、結局二つの維持し得る生命に就ての假設が存在する。それはカソリック教徒と唯物論者である¹³⁷。

“唯物論者”は、時局にあつては、もはや存在しえない。その影は、ニュー・カントリー派の紹介というかたちをとって、『新領土』に生きながらえていたにすぎない。残された選択肢は、西欧のものである。

1934年の『異教の神々を求めて』以降のエリオットの立場は、福原にいわせれば、“エリオットのやつ、変な方角へ行っちゃったな、と迷惑した”¹³⁸ということになる。「現代教育と古典」を収めた1936年の『古今評論集』もまたそうであった。その二つの仮設は、30年代のエリオットの立場を最も強

烈に示したものである。ただし、同じ日、“支那戦線へと猛進してゐる”状況を確認する鮎川にとって、また、“智的指導原理を完全に喪失”している“知識階級”にとっても、エリオットの仮設を“レーゾン・デートル”として定位するには、困難が伴うであろう。

1938年の『新領土』は、岡橋祐訳「ポオル・ヴァレリーの的方法」について、エリオットの評論を矢継ぎ早に紹介してゆく。6月号の兒玉實用訳「宗教と文學」、11月号の、大澤衛・安藤一郎訳「パスカルの『感想録』」である。8月号の「死者の埋葬」を挟んで、1920年代初頭の前衛詩人エリオットと、ヨーロッパの思潮にたいして宗教的な立場を尖鋭にする1930年代のエリオットが、この年の『新領土』に、同時に登場¹³⁹したのだ。編集者でもあった上田保の面目躍如たるものがある。

もちろん、エリオットへの批判的立場の紹介も怠ってはいない。10月号、ウインダム・ルイスとスティーヴン・スペンダーの、二つの「エリオット論」¹⁴⁰がそれである。さらには、同号で、G・W・ストウニア「オーデンの過程」で、『荒地』第3部の9行を奈切哲夫の訳¹⁴¹で読むことができる。10月7日の日記に、鮎川は記す。“今月の「新領土」は特に面白く読めたやうである。ウインダム・ルイスの『エリオット論』は最も興味深かったエッセイである。”

10月21日、「読書日記」によれば、鮎川が『詩と詩論(8)』¹⁴²を読んだことが確認される。新たに古本で手に入れたものであろうか。ここには、北村常夫訳「傳統と個人的才能」が収められていた。彼が目にしたことは疑いえない。

詩は情緒の放縱なる轉廻ではなくして、情緒からの逃避である。詩は個性パソナリテイの表現ではなくして、個性からの逃避である¹⁴³。

この一節は、かつて読んだヴァレリー論の“自己拋棄”を連想させたかもしれない。この日、彼は池田時雄に“26日、戦争詩の夕べのある日会はないか”と書き送る。

「戦争詩の夕べ」のあと、文学部予科の仲間と同人雑誌を出そうという話が煮詰まり、“題名は20世紀が一番良からう”ということになった。11月5日

の日記。

あくまでも青年として、20世紀の知性を高揚せねばならない。イデーの最も健全なる、文学芸術に対する至高の精神を把握せんがために、我々の文学的領域に於ける革命的思考精神を行動の上に一つの軌跡として文学史の上に印さんがために、20世紀は存在する。我々はすべて20世紀の存在価値レエゾン・デートルを、我々の芸術文学に対する新しい認識、未知なる(しかも厳然として人間の内部の血を貫ぬいていづれかへ流れてゐるところの)世界観の獲得をなさんとして時代の辛酸、苦痛をなめても追求し欲求しやまぬ我々の知性の中に発見せねばならぬであらう。

11月11日、鮎川は佐藤清の『エリオット』¹⁴⁴を手にする。1933年1月に刊行されたものであるが、ここに収められた『荒地』の解説は、当時でもなお数少ない手引きのひとつであった。そして、『新領土』11月号に掲載された「パスカルの『感想録』」は、この前後に読まれたのである。

パスカルの、人間の束縛に對する幻滅的な分析は、時にパスカルが實際に又究極に、その絶望の中で現實に堪へたり、自由人たる無崇拜の大膽な満足感を味つたりすることが出来ない不信心者であつた、といふやうに解釋される。彼の絶望・彼の幻滅は、然しながら、個人的な缺陷の證左にならない。それは全く客觀的なものである。何故といふに絶望と幻滅は理智的なこゝろの發展に於ける缺くべからざるモメントだからである。そしてパスカルの如きタイプには、絶望と幻滅は、基督教神秘家の發展に於ける一つの必然的段階たる、早魘・暗夜の類同なのだ¹⁴⁵。

翌月、12月2日、18歳の鮎川は、日記にこう記す。

人間は苦痛の中に生きてゐる間が、最も幸福な期間であると思つた。どうしても沢山の重荷が肩にかかってくると悲鳴を上げたくなるものだが、そこを忍ばねばならないと思ふ。それだけの強靱な神経を持たない

限り文学の健全な発展完成は見られるものではない。

この“強靱な神経”は、エリオットのパスカル論を経由して確立されたのである。文学にたいする覚悟は、やがて、“絶望と幻滅”に立ち向かわざるをえぬ青年鮎川の、生きぬくための指針となってゆくであろう。

同月12日の日記に、モダニズムやシュルレアリスムとも離れてゆく鮎川の姿がある。“滝口修造の『近代芸術』のエスプリも、此頃ではあまり僕を刺激しない”と。26日、鮎川はその書評を『LE BAL』のために書きあげる。

今や超現実主義は理論的な追求部面を更に拡大しなければならぬ時期に⁽⁷⁷⁾望むである。因習を打破し過去の藝術方式から脱却して、現在まで前進してきた超現実主義は、その現代的な価値の焦点を新しく決定しなければならない。かかる時にこの書は有力な手引きにもなることであらう。我々にとって、超現実主義以上に興味を引き研究の対照として努力を傾倒し得る新しい藝術精神がない限り、もしも、なかつたとしたならば。
(付点引用者)¹⁴⁶

シュルレアリスムとの訣別と同時に、同じ日、1938年12月26日、鮎川は「**覚書 現代詩の性格的変化と方向**」を書きあげた。

かつての「『新領土』加盟についての覚書」とおなじように、鮎川はここでも、抒情詩の問題を採りあげる。旧来の抒情詩は“感情過多症或は感性の徒な氾濫に過ぎなかつた”が、これに対抗して、“知性といふ近代的な言葉の云ひ廻しによつて、方法の角度から装備された抒情詩の世界が、われわれの前に展開され”ている、と鮎川はいう。ただし、それは“決して感性からの脱却に非ずして、知性によつて平衡をとる”ものである。したがって、そのような抒情詩を書いている詩人たちは“動きのとれない知性のために、變に自由を束縛されてしまつてぎごちない動作を繰り返してあることが多い”のであり、“飛躍性を失つてしまつた精神など惨めなもので、”その“表現手段がたちまち類型化してしまひ弾力性を失つてしまふことは當然である”¹⁴⁷のだ。

ただちに気づかれるであろう。“感性からの脱却に非ず”という切り口は、「伝統と個人的才能」の立場をいい変えたものである。鮎川はエリオットを根拠にして、モダニズムを糾弾するのである。“知性によつて平衡をとる”としても、それは“飛躍性を失つてしまつた精神”にすぎない。その“知性”なるものが、鮎川のことばでいえば、“強靱な神経”によって支えられていないからである。彼は、かつて4月の「『新領土』加盟についての覺書」に、“主知的な批判精神は詩意欲の一つの表れ”¹⁴⁸である、と書いた。しかし、いま、『新領土』の同人であり読者であった鮎川は、その知性あるいは主知的批判精神の武器であるサタイアが“莫迦々々しき企てと化した”ときに露呈される、抒情の敗北を目撃したのだ。鮎川は、これら新しい詩人たちの“詩意欲”の類型化の根元に“主知的な批判精神”の弛緩を見る。それゆえ、その抒情詩は“彼等の輕蔑する古い詩人と別の方面ではあるが同じ個人的な氣儘な傾向をとるようになつてしまふ”¹⁴⁹のである。

新しい「覺書」、「覺書 現代詩の性格的變化と方向」はこのように結ばれる。

詩は、一時代を通じて他の時代にまで延びてゆく觸手を持つてゐるが、何よりもその詩の中には詩人の生きた時代が常に包含され表現されてゐるのである。

われわれは現代に住み、詩に對して積極的態度を持たんとするならば、現代の時代的精神を把握して、もつと思想性主題性の追求を目指さねばならぬだらう。現代人として思想的に苦惱し慰安し、生きてゆくことが先であり、藝術はその次である

これからは、主題性の追求といふ點に於て文學的な要素を帯びてゆくことは、現代詩の歩みゆく過程に於て、必然であるだらう¹⁵⁰。

“超現實主義、”新しい抒情詩、広くはモダニズムより、“生きてゆくことが先”である。それでは、“思想性主題性の追求”はどのようにして文學に可能であろうか。それは、“飛躍性を失つてしまつた精神”に陥らぬための“強靱な神経”からなされるほかない。

この「覺書」について鮎川はのちに記す。“戦前における「LUNA」の運動、戦後における「荒地」の運動のイデオログとしての<私>が誕生したのは、このときからであった”(付点原文のまま)¹⁵¹と。戦後の鮎川が、文学の“思想性主題性”にたいして、たえず疑惑を抱くのも、この“強靱な神経”のゆえである。

年があらたまり、1939年2月27日、巻頭に「覺書 現代詩の性格的變化と方向」をおき書評に「近代藝術」を配した、『LE BAL』第19輯がとどく。そして、同日、鮎川たちの『荒地』創刊号が刊行される。

その「後記」である。

我々は「荒地」の出発点を、現代文學の不安と混沌の中に持った。(略)豫想以上の困難と苦痛とが、現代の不安を背景として我々の前途を覆ふかも知れない。我々は現實の生き難さのために自己を失つてはならない。時代が我々に與へる荷が重ければ重い程、我々の新しい文化に對する熱情は擴がり、建設の意欲はどこまでも伸びるであらう。かかる不安と混沌の時代の最唯中に出発点を持つたことは、我々の不名譽ではなくしてむしろ名譽である¹⁵²。

“新しい文化”への熱情、あるいは“建設の意欲”は、そのまま、時局下にくり返された語り口である。しかしながら、すでに、“日記もうっかり書けない時代”になっていたのだ。鮎川が語ろうとするのは、“不安と混沌の時代の最唯中”を生きぬく覚悟であった。

2月6日に、“明日には「荒地」の編輯後記と小評論を完成したい”と記したとおり、この「後記」は創刊号に間にあったのである。一方、創刊号に掲載されるはずの“小評論”は遅れて、『荒地』第2輯の、「不安の貌」となったと思われる。末尾には、“14年4月12日”と付されている。

「不安の貌」は、鮎川たちの戦前の『荒地』のマニフェストと考えていい。“我が國の世界的位置に於ける名譽をそのまま、文化的高度もそれに伴はねば眞の世界的民族とは云ひ難い”あるいは、“われわれは眞に民族的特質を世界的な文化の標準にまで磨き上げねばならない”としつつ、鮎川は、

覚悟を述べる。

このやうな時代に要望されるのは、如何なる時代的な或は社會的な苦惱の中に於てもあくまで生活態度を崩さずに藝術的良心を失はずに生きてゆくだけの精神の強靱さでなければならぬ¹⁵³。

1939年4月、その1年前に「『新領土』加盟についての覺書」で“主知的な批判精神”を主張し、その間に“強靱な神経”を定位する「覺書 現代詩の性格的變化と方向」をはさんで、この「不安の貌」で確立されたのは“精神の強靱さ”にほかならない。それはまた、“健全な批評精神”¹⁵⁴である。それを支えるのは、ふたたびエリオットである。

鮎川は、一戸努訳「批評に於けるエクスペリメント」を傍らにして、その一節を書き写す。1930年11月に刊行された『詩と詩論』の別冊、『現代英文學評論』である。これもまた、いつか、古本で求めたものであろう。一戸訳は、こうである。

文學が文學である限り、文學批評の餘地が残される。即ち文學そのものが生まれるのと同じ根柢に立つ批評の餘地が残される。何となれば、詩、小説、その他のものが書かれる限り、その第一の目的は孰れの時代を通じても、そのなかに恒久性なるものを持つ特殊な快感を與へることで、如何にその快感の説明が困難であり多様であらうとも 常に存在せねばならぬからである。従つて批評の任務はその境界線を擴大するばかりでなく、その中心點を明確にすることであり、後者の要求の切急が前者の要求をも生じて来る¹⁵⁵。

このエリオットの発言は1929年のものだが、以降、わが国のエリオット理解で特異な位置を占めていた¹⁵⁶。それが、いま、10年後に、文芸を志すひとりの青年の支えとなったのである。鮎川を圍繞する文學批評の狀況は、同時に、時局下の狀況をも意味した。彼は、書き写したエリオットを傍らにおいて、このように結ぶ。

とにかく批評を本格的に建て直して文學を正しい發展に導くために、あらゆる時代の光明と不安を分析検討して、世の輕侮や失敗に屈しない強靱な信念によつて文學を救ひ出さねばならぬ。新しい時代の文學的分野に於ける創造は、表面的な混亂などに少しも動ずることのない不敵な批判的精神が、新しい要素を自在に驅使することによつて、その扉が開かれるのである。

われわれは瞬時も停滯することは許されないのだ¹⁵⁷。

発行者兼編輯者上村隆一は、この『荒地』第2輯刊行後、警視庁から呼出を受ける。二度目は、それを『文藝思潮』と改題したあと¹⁵⁸である。その「雜記」に“今輯から「文藝思潮」と改題しました。皇紀二六〇〇年を奉祝し、われわれの發展を祝福して、ここに第六輯を刊行しました”¹⁵⁹と記し、その扉に“皇紀2600年奉祝”と大きな活字で配していたにもかかわらずである。だが、ここに掲載された“昭和十五年十月”の日付をつけた「圍繞地」に、わたしたちは、鮎川がいう“精神の強靱さ”を根拠とする“不敵な批判的精神”が、“良い調和の翳”¹⁶⁰と姿をかえて、生きつづけていることを知る。

東京オリンピックが予定されていた昭和15年、すなわち、1940年の12月、『荒地』は、『文藝思潮』のわずか一冊を経て、通巻6輯で終わる。『LUNA』を改題した『LE BAL』は8月に終刊となり、9月から『詩集』となっていた。鮎川は、この年3月に『神戸詩人』の「姫路グループ」の何人かが官憲に逮捕された、という知らせを受けていた。いわゆる“神戸詩人事件”である。逮捕された者のなかに、『LE BAL』の同人でもあった羽生がいた。

1938年5月の羽生豊訳「現代教育と古典」が、鮎川にどのように読まれたかは定かではない。しかしながら、英文学者の中橋一夫は、『文學界』1940年新年号の「現代教育論」に、あの一行を、“人生に関する二つの而して唯二つだけの終局の合理的な假説がある　カトリック主義と唯物論である”¹⁶¹と訳した。そして、1943年6月、翻訳書『異神を追ひて』に収めるにあたって、中橋は「現代教育と古典」と改題し、訳に手をいれた。

人生に関する二つの、そして唯二つだけの終局の合理的な假説がある
カトリック主義と唯物論である¹⁶²。

この時、鮎川は戦場にいた。そして、戦後の鮎川の文明批評は、この一行¹⁶³を支えとして展開されるのである。ちょうど、田村が「死者の埋葬」の一行を再発見したように。

『荒地』¹⁶⁴創刊号に上田訳「死者の埋葬」の冒頭4行を掲げたのは鮎川の判断であったが、当初の仲間は、“ほとんどエリオットを知らず、名前さえも知らないというのが大部分であった”と鮎川は回想する。しかしながら、“エリオットの文学を少しずつ理解するにつれて、私たちの眼に、文明の頽廃に真向うから挑む真摯な詩人の姿が、ようやく偉大な存在として映るようになってきた”¹⁶⁵のだ。鮎川の場合についていえば、その“強靱な精神”は、『新領土』の翻訳や紹介記事、古本で求めた『詩と詩論』、そして、友人たちとの交遊をとおして知った、エリオットに養われたのである。

それでは、エリオットの詩は鮎川にどのように食い込んだのか。その緩やかな浸食が明らかになるのは、のちのことである。

注

1 無署名「新映畫」『セルパン』第80号(1937年9月) 114。『南方飛行』の広告は、8月号裏表紙裏。その“空の外人部隊からのレポルタージユ!!”という紹介は、時局を配慮したものか。

なお、原作『南方飛行[便]』の翻訳については、拙稿「鮎川信夫と『新領土』(その1)」『言語文化』第2巻第4号(2000年3月) 505を参照されたい。以下、この稿を「その1」と略記する。

2 檜崎勤「南方飛行」、および、伊藤整「大地」、同上、108-112。

3 飯島正「外国映畫の一年」『セルパン』第83巻(1937年12月) 32。

4 筈見恒夫「外国映畫の輸入禁止」『セルパン』第82巻(1937年11月) 96。

5 飯田心美「ニュース映畫の検討」『セルパン』、同上、104。

6 応募歌詞は57,578通、作曲9,555通に達した。藤牧祐生「日中・太平洋戦争時代

- 年表」ver2(99/8/10)、<http://www.netlaputa.ne.jp/~house/nenpyo/taiheiyo/nenpyo.htm>を参照。本稿はこの年表に多くを負っている。
- 7 三國一郎『戦中用語集』(岩波新書、1985年) 96頁。青年詩人森川幸雄の作は、“<補作>にあたって北原白秋と佐佐木信綱が激論をたたかわせ、ほとんど原形をとどめなかった”という。とすれば、瀬戸口藤吉による作曲とあわせて、この行進曲は官製であった。なお、ほかに、外務省小畑薫良訳「愛國行進曲」がある。Shigeyoshi Obata. trans. “Patriotic March,”『英語青年』第79第1号(1938年4月1日) 27を参照。
- 8 加藤憲治「本年の本誌投稿作品」、および、森川幸雄「蠟人形諸氏へのご挨拶」、『蠟人形』第8巻第12号(1937年12月) 44-49; 68。
- 9 長田恒雄「はがき通信」『VOU』第20号(1937年10月) 41。この資料は、和田博文氏より拝借した。
- 10 <翼>は両切りたばこ10本入りで、1937年8月10日から発売され翌年3月31日に廃止となる。リビングショップ安藤(有)「懐かしい日本のタバコ歴史博物館」<http://www.wiz-s.co.jp/Isa/oldcigarette/oldcigarette7.htm>を参照。
- 11 北園克衛「DECOUPAGE (VOUの國家的奉仕)」『VOU』第20号(1937年10月) 42。また、この“20号には近衛総理大臣のアドレスを挿入する”とも。
- 12 藤牧祐生「日中・太平洋戦争時代年表」。
- 13 村野四郎「平和的な印象記 昭和十二年度詩壇について」『文藝汎論』第7巻第12号(1937年12月) 20。
- 14 村野四郎「平和的な印象記」、21。
- 15 同上。村野が『20世紀』の存在に触れていないことに注意されたい。彼は、敢えて、それを無視したように思われる。ほぼ1月前に、“たとへニュー・カンントリー派の作品、エッセイを紹介したところで、我々は決してニュー・カンントリー派の運動に自身投入するのでも何でもなし”と書いたばかりの村野にとっては、『20世紀』との関連を認めることはできなかったのであろう。拙稿「その1」、511を参照。
- 16 近藤東「後記」『新領土』第2巻第7号(1937年11月) 75。拙稿「その1」、511を参照。
- 17 木下常太郎「詩壇時評」『文藝汎論』第8巻第1号(1938年1月) 36。
- 18 木下常太郎「詩壇時評」、同上、36。
- 19 木下常太郎「詩壇時評」『文藝汎論』第8巻第2号(1938年2月) 14。
- 20 木下常太郎「詩壇時評」『文藝汎論』第8巻第1号(1938年1月) 36。
- 21 木下常太郎「詩壇時評」『文藝汎論』第8巻第2号(1938年2月) 15。村野四郎「近代修身」『文藝汎論』第8巻第1号(1938年1月) 1の全行はつぎのとおり。

ニツケルの雲がゐる
 體育館の道をゆけ

君らの弟は白いリンネルを著て
 罪人のやうに
 肋木に懸つてゐる
 枯木と風の中にぶら下がるもの
 ピンク色の犠牲を信じよ
 いまや
 忍従のアスファルトの下に
 ふるき球根をゆめみること勿れ

- 22 『文藝汎論』の奥付による発行日と発売日のずれについては、後注54を参照されたい。
- 23 福田君夫「國民精神總動員の歌」『日本詩壇』第6巻第1号(1938年1月)、130。詩人福田君夫は、歌人としては北原秋美。
- 24 「アンケート 今回の戦争に際して、所謂戦争詩は我國に興起するや、否や? 詩精神と散文精神との最も簡単な區別について?」『蝸人形』第9巻第1号(1938年1月)、25-31。この項目は、萩原朔太郎と春山行夫をそれぞれの代表的論客とする論争を継承したものである。だが、時局にあつて、戦争詩の問題が優先されたのである。以下それぞれの回答は、28、25、および、26。
- 25 三國一郎『戦中用語集』、55頁。他に、“南京事件”の報道管制に関連しては、坂本龍彦『言論の死』まで「朝日新聞社史」ノート(岩波書店、1996年)370頁。なお、『セルパン』第86巻(1938年3月)に広告された記録映画『南京』は、1938年2月20日に公開された。田中純一郎『日本映画発達史』第3巻(中公文庫、1976年)、176頁によれば、“南京入城の前後から、激戦直後の荒廃した市中、住民の生活、史蹟等を適確に捉え、画面外から悲愁と感傷さえただよう”作品であつた。
- 26 Y・H [春山行夫]「編輯者の言葉」『セルパン』第84号(1938年1月)、206。
- 27 同上、206。
- 28 村野四郎「平和的な印象記」、24。
- 29 「日本詩人協会」の結成は1940年10月21日。結成後に作成されたその「趣意書」と「綱領」については、村野四郎「詩人祭の夜」『セルパン』第11巻第3号[通巻第122号](1941年3月)、90。他に、結成経緯については、巖谷大四『非常時日本』文壇史(中央公論社、1958年)、17頁。委員および会員については、櫻本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』(青木書店、1995年)、23頁。
- 30 拙稿「その1」、496-498を参照。
- 31 鮎川信夫「西脇順三郎」『鮎川信夫著作集』第4巻(思潮社、1974年)、82頁。初出は、「解説」『西脇順三郎詩集』(弥生書房、1967年8月)。
- 32 鮎川信夫「現代詩との出会い」『鮎川信夫著作集』第2巻(思潮社、1973年)、337頁。初出は、山本太郎他『わが愛する詩 わたしのアンソロジー』(思潮社、

- 1968年4月)。
- 33 鮎川信夫「西脇順三郎」、82頁。
- 34 鮎川信夫「現代詩との出会い」、339頁。
- 35 同上、339頁。
- 36 鮎川信夫「最初期詩篇についての感想」『現代詩手帖』第20巻第3号(1977年3月) 189。
- 37 鮎川信夫「T・S・エリオット」『鮎川信夫著作集』第6巻(思潮社、1975年) 352頁。初出は、「T・S・エリオットを想う」『英語青年』第111巻第5号[The Special Number in Memory of T. S. Eliot](1965年5月)。なお、1938年8月16日から翌年2月11日までの「読書日記」に記された『詩と詩論』については、後注142および143を参照。
- 38 牟礼慶子『鮎川信夫 路上のたましい』(思潮社、1992年) 49頁、および、272頁。本稿はこの書に多くを負っている。詳細な「鮎川信夫年譜」を含むこの鮎川論がなければ、本稿はありえなかった。なお、この新潮文庫版『萩原朔太郎集』に収録されたのは、「愛隣詩篇」「月に吠える」「青猫」「郷土望景詩」と「散文詩」であり、『氷島』詩篇は収録されてない。
- 39 鮎川信夫「小自伝」『鮎川信夫集』[現代詩文庫9](思潮社、1968年) 135頁によれば、このとき、鮎川は“中学二年であったが、この事件に異常な関心を抱いた”という。正確には、中学三年の三学期である。かつて上村家の二階には山口一太郎の事務所があり、ここに青年将校が集まっていたのである。他に、鮎川信夫「最初期詩篇についての感想」、190-191を参照、
- 40 拙稿「その1」、503を参照。
- 41 鮎川信夫(構成・清水正己)「トピカから始まる ナショナリズムとモダニズムが交差する場所」『現代詩手帖』第29巻第10号(1986年10月) [20]。
- 42 『詩と詩論』に掲載された滝口修造の作品は、「TEXTE ÉVANGÉLIQUE」(第3冊)、「TEXTE(II)」(第12冊)、「絶対への接吻」(第13冊)。
- 43 鮎川信夫「トピカから始まる」、[20-21]。
- 44 本稿で言及する鮎川の初期作品は、「落葉」と「金の果實」をのぞいて、鮎川信夫「初期詩篇」『現代詩手帖』第20巻第3号(1977年3月) 174-187を経て、『鮎川信夫全集』第1巻[全詩集](思潮社、1989年)に収録されている。
- 45 北村太郎「けむれる一個の霧 主に戦中の詩について」『鮎川信夫著作集』第7巻(思潮社、1974年) 378頁。選者佐藤惣之助は、“一見空虚のような雰囲気、何物かを暗示してゐる”と評した。参照、牟礼慶子『路上のたましい』、273頁。
- 46 『LUNA』は、1938年4月、第13輯5月号で終わり、6月の第14輯7月号から『LE BAL』と改題される。『LUNA』と『LE BAL』そして後続の『詩集』の詳細については、田村隆一「若い荒地」『詩と詩論』D(思潮社、1973年)に多くを負っている。

- 47 鮎川信夫「中桐雅夫」『鮎川信夫著作集』第4巻、91頁。初出は「中桐雅夫について」『中桐雅夫詩集』[現代詩文庫38](思潮社、1971年)。ここには“一九三九年の夏の終り頃”とあるが、明らかな誤りである。“一九三八年のはじめには、私は『新領土』に入っていたし、大学の仲間とも雑誌を出す計画をたてていたので、けっこう何やかやと忙しく、その後に『LUNA』の存在を知ったとしても、改めて加入する気にはならなかったにちがいない”(同頁)という記述も、事実と反する。
- 48 牟礼慶子『鮎川信夫 路上のたましい』、38頁、および、273頁。『LUNA』入会経緯については、他に、牟礼慶子「森川義信宛鮎川信夫書簡 新資料をめぐって」『現代詩手帖』第42巻第6号(1999年6月)、141。
- 49 「黄昏」の後、鮎川信夫「凍眠」『LUNA』第8輯(1937年12月号)、8、「金の果實」『LUNA』第9輯(1938年1月号)、10がある。「凍眠」の末尾に“37.11.17”、「金の果實」には“12.11.17”の日付がある。井垣哲雄「さ・え・ら 第9輯批評」『LUNA』第10輯(1938年1月号) 19は、「金の果實」を“童謡です”とそっけなく評した。鮎川信夫「扉の中」を掲載したこの第10輯は、“印刷屋の職工が感冒のために”刊行が遅れていた。鮎川が手にするのは、2月8日、『新領土』へ会費を納めた日であった。第10輯は2月号であり、田村隆一「若い荒地」(62頁)にいうように、奥付の発行日は1月25日。
- 50 村野四郎「平和的な印象記」、23。“一般的詩誌”とは、“『文藝汎論』『日本詩壇』『蠟人形』等”を指す。ここで村野が“時代の最も新しい詩人選手達は凡てこゝ[『文藝汎論』]を晴の競技場として、そこに各自の更新されたレコードを残した”と記すように、鮎川もまた、『文藝汎論』を経由して詩人となってゆくのである
- 51 鮎川信夫「漂泊者の哀歌」『文藝汎論』第8巻第2号(1938年2月)、57。
- 52 鮎川信夫「落葉」『日本詩壇』第6巻第2号(1938年2月)、94。
- 53 鮎川信夫「逃亡」『蠟人形』第9巻第2号(1938年2月)、36。なお、「逃亡」『鮎川信夫全集』第1巻、540頁の第5行、黒い犬が“違ってくる”は“追ってくる”の誤植。
- 54 「漂泊者の哀歌」は、1937年12月に投稿されたと想定される。1938年2月14日付日記の、“『文芸汎論』三月号が発売された”という記述から、同誌は奥付よりもはやく、前月中旬に発売されていたことがわかる。この作品を掲載した2月号は1月中旬の発売であり、投稿は、12月でなければならない。さらに、4月7日付日記に、“汎論へ「春の頌歌」を送る”とし、6月18日付日記、“文芸汎論にのせた詩は失敗だった”とされる。これは、鮎川信夫「春の頌歌」『文藝汎論』第8巻第7号(1938年7月)、79を指す。この間、およそ二ヶ月。これにならえば、「漂泊者の哀歌」の投稿は、1937年の12月上旬と想定できる。
- 「落葉」の投稿は、1937年12月と想定される。『日本詩壇』第6巻第1号(1938年1月)、176の、「一般投稿募集」要領によれば、“締切は[毎月]30日。降着のも

のは次號に廻す”ことになっていた。発売日は未詳だが、同誌が奥付どおり2月1日に発行されていたとすれば、選考と印刷に関わる期間を含めて少なくとも1月をおかねばならないから、「落葉」は、おそくとも、前年1937年12月末までに投函されたと想像される。なお、同誌第6巻第4号（1938年4月）109の、「選外佳作」欄の第二番目に、“「白い船室」（東京・鮎川信夫）”がある。「白い船室」が投函されたのは2月末まで、と想定される。この時期は『新領土』加盟と前後する。

「逃亡」の投稿は、1937年12月10日まで。『蠅人形』第8第12号（1937年12月）37に、“明春二月號は読者作品號！”と予告され、締め切りは12月10日となっている。

- 55 近藤東「詩のない時代 原一郎氏へ」、および、北園克衛「VOUクラブとその外郭線」、『蠅人形』第8巻第12号（1937年12月）32-37。二つをまとめた標題は「本誌十月號原一郎氏のエッセイに對する 二つの抗議と主張 『新領土』を代表して近藤東氏 『VOU』を代表して北園克衛氏」。発端は、原一郎「詩の即時代性と超時代性 『新領土』と『VOU』との態度に觸れて」、『蠅人形』第8巻第10号（1937年10月）10-14。
- 56 鮎川信夫「日記」『鮎川信夫著作集』第7巻、308頁。「日記」「読書日記」はこの版によるものとし、以降、頁を注記しない。ただし、1938年“10月26日”が正しくは“10月17日”であるなど、誤植あるいは誤記については、『鮎川信夫全集』第2巻（思潮社、1995年）と対照照合するものとする。
- 57 鮎川信夫「最初期詩篇についての感想」、191。伊原隆夫を筆名にした理由を、“何となく鮎川名を用いることは他の[『LUNA』]同人に憚りがあるような気がした”(189)ためだという。
- 58 伊原隆夫「靴」『若草』第14巻第1号（1938年1月）。原資料未見。牟礼慶子『路上のたましい』、274頁によれば、「入選」より上位の「推薦」となり本文に組まれた。堀口大學は“影絵によって現はした暮れ方から夜への心像のファンタジイ 然も、必然性も失ってはゐない”と評した。投稿は、1937年10月以降11月中旬まで、と推定される。その根拠は、次注を参照。
- 59 たとえば、「船」『若草』第14巻第3号（1938年3月）126について、2月12日付日記に、“若草三月号に「船」が載る”と記されている。同誌は前月中旬までに発売されていた。したがって、「船」の投稿は、前年12月から遅くとも1月中旬まで、と想定される。同様に、「シャボン玉」同誌第14巻第6号（1938年6月）は、5月中旬までに発売されていたはずであるから、執筆は、3月以降4月中旬までと考えられる。「シャボン玉」の想をえたのは、春山行夫『花とパイプ』から抜き書きされたブルトンの詩論であったと思われる。3月6日付日記では、“イメージが明瞭であれば、例へば<シャボン玉>といふイメージがはっきりして居て、<庭園>といふイメージが明瞭であつたら、<シャボン玉の中へ庭園は、這入れない、グルグル廻りをまはってゐる>といふイメージは完全に理解される”とある。

60 上注54を参照。

61 鮎川信夫「各人各説」『文藝汎論』第8巻第3号(1938年3月) 84。

62 堀口大學「冬日抄」は、冒頭の村野四郎「近代修身」につづいて掲載されていた。参照、堀口大學「冬日抄」『文藝汎論』第8巻第1号(1938年1月) 3-4。

63 村野四郎「近代修身」『文藝汎論』第8巻第1号(1938年1月) 1。

64 村野四郎「近代修身」『日本詩壇』第6巻第1号(1938年1月) 22。この作品は、拙稿「その1」、529の注74に引用。

65 村野四郎「近代修身 田園考」『蠟人形』第9巻第5号(1938年5月) 14-15。

66 池田時雄は、鮎川の3月17日付日記によれば、“二十歳”であり、『LUNA』の同人でもあった。池田時雄「氏」『LUNA』第13輯(1938年4月)、田村隆一「若い荒地」の引用(67頁)によれば、その終わりはこうである。

チエリイ三銭値上氏 / バット八銭据置氏 / 愛国行進曲氏 / 国家総動員法案氏 / 憂愁氏 / 情熱氏 / 氏 / 氏 / 氏 / 氏 / 氏

詩人は“憂愁”のなかで“情熱”を掻きたてようとしていたのだ。

67 “今日山中散生氏より氏の轉向を宣告した御書簡を得た。今後の氏の動向に最大の關心を持つものである”と、丹羽哲夫「各人各説」『文藝汎論』第8巻第3号(1938年3月) 83。のちに、鮎川は<五月號の讀后感>「各人各説」同誌第8巻第7号(1938年7月) 77にいう、“「牧歌」獨特の魅力あり。山中氏の轉向とは?” 鮎川は山中の轉向宣告と現実の作品「牧歌」同誌第8巻第5号(1938年5月) 50-51との乖離を指摘しているのだ。

68 山中散生「各人各説」『文藝汎論』第8巻第3号(1938年3月) 83。

69 黒沢義輝「[山中散生]年譜」『山中散生・1930年代のオルガナイザー』和田博文監修『コレクション・日本シュールレアリスム』第6巻(本の友社、1999年) 475頁。

70 鮎川信夫「各人各説」『文藝汎論』第8巻第3号(1938年3月) 84。

71 鮎川信夫「落葉」『日本詩壇』第6巻第2号(1938年2月) 94。“落葉”はもちろんのこと、“凍(みついた心)”“月”“風”“黄昏”も、このころの作品に共通する心象である。ただし、“黄昏色の外套”は、『文藝汎論』新年号に掲載された堀口大學「冬日抄」から想をえたことは、ほぼ、まちがいない。その一部はこうである。“日暮れ方 / 風が外套をとりて来た / [1行空け] / 街で凍える人達に / 着せてやるとの事だつた”(3-4)。上注54に示したように、新年号は前年の12月中旬には発売されていたから、これに触発されることは可能である。“どすとえふすきい”のように傍点をつける手法は、「船」『若草』3月号、126の、“とうめいな夢”がある。ドストエフスキーは、萩原朔太郎「初めてドストエフスキーを讀んだ頃」『廊下と室房』(第一書房、1936年)をはじめとして、萩原がたえず言及する作家であった。なお、「落葉」の執筆時と重なるように、神西清訳著「ドストイエフスキー篇」『世界文豪讀本全集』第15巻(第一書房、1937年12月20日)がある。

また、「鮮血の滴り」の心象は、「冬日抄」につづく田中冬二「開墾地」に触発された可能性も否定できない。詩人は、山麓のさまざまな「黄葉」からはじめ、「赤く色づく」「うるしの葉」を歌う。そして、「夕暮 落葉をよせて火を焚い」ているときに「鱒を養殖してゐる湖水の方に」「銃聲が二つつづ」くのを聴く(4-5)のである。

72 鮎川信夫「落葉」の前に記された、隈元郊「戦死者の靈に」(94)と比較されたい。

噫。血潮に彩られて繰展げられてゆく歴史の襞に埋れて。日夜。烈日を喰らひ怒濤を反撃して屹然。崇高な満足の中に永劫の眠りを異境に結ぶ壯嚴の戦士の魂よ。榮光に輝くその屍。清冽な祖國の香に漲り。神々も来て額づかん崇麗の君が偉業。 殉國 。

“噫。血潮”と書いたとき、詩人は「愛國行進曲」が隠蔽していた恐怖を知っていた。しかしながら、それを“歴史”へと開いてゆくとき、村野がいったように“観念的な素材としての戦争”詩となり、“殉國”に至るのは必然であった。鮎川の目は、背後の歴史を“血の滴り/赤い落葉”というひとつの心象に還元する。これは詩の手法であるばかりか、おそらく彼の生き方にかかわるものであった。

73 村野四郎「後記」『新領土』第2巻第10号(1938年2月) 300。

74 饒正太郎「青年の出發」『セルバン』第84号(1938年1月) 30-31。

75 饒正太郎「現代に於ける詩の意義」『新領土』第2巻第9号(1938年1月) 229。

76 池田時雄「現代に於ける詩の意義」『新領土』第2巻第9号(1938年1月) 229。

77 池田時雄<今年の思ひ出>「各人各説」『文藝汎論』第7巻第12号(1937年12月) 86。

78 鮎川信夫「各人各説」『文藝汎論』第8巻第4号(1938年4月) 95。

79 鮎川信夫「朔太郎考」『鮎川信夫著作集』第4巻、72頁。初出は『現代詩手帖』(1963年9月)。

80 同上、72頁。飯島耕一は「果して「あとかたもなく」かどうか。ここには「あとかたもなく」のはず、という意識が働いていたのではないか」(傍点原文のまま)という。重要な指摘である。飯島耕一「もうれつなるコモンセンス」『鮎川信夫著作集』第4巻、403頁を参照。新潮文庫版『萩原朔太郎集』に『氷島』詩篇は収録されてない。しかしながら、鮎川の「漂泊者の哀歌」と「遊園地区」が、その冒頭の二篇「漂泊者の歌」と「遊園地にて」の表題と響き合うように筆者には思える。さらに、「明日の雲が地平線に/波とひろがるとき」「きしむ肋骨をふみしめ/聳えたつ尖塔にのぼる」鮎川の漂泊者の姿は、「悲しき落日の坂を登りて/意志なき断崖を漂泊ひ行」く萩原の漂泊者と重なって見える。なお、細見和之は、「戦後版「橋上の人」が、『氷島』巻頭の「漂泊者の歌」の、朔太郎に夢見られた口語自由詩による、「韻律なき韻律」をそなえた見事な翻案のようにも読

- める”と指摘する。細見和之「百年の孤独 萩原朔太郎と鮎川信夫」『現代詩手帖』第42巻第2号(1999年2月) 63を参照。
- 81 鮎川信夫「現代詩との出会い」、339頁。
- 82 鮎川信夫「中桐雅夫」、94頁。
- 83 鮎川信夫「『新領土』加盟についての覺書」『LUNA』第13輯(1938年5月) 29。
- 84 正確には、萩原朔太郎「青年に告ぐ」『無からの抗爭』(白水社、1937年9月)、『萩原朔太郎全集』第4巻(新潮社、1960年) 396-397頁。鮎川は「新しさについて」『詩人の使命』(第一書房、1937年3月)、『萩原朔太郎全集』第4巻、186-187頁と混同していたのである。「青年に告ぐ」はこうである。“「若さ」といふこと、「新しさ」といふことは、無價値といふことの外に意味がないのだ。今の時代の青年に對して、僕が言ひたいことは次の標語に盡きるのである「一切を拒絶せよ。汝自身をさへ含めて。一切を拒絶せよ！」なぜならそれより外に、諸君の生きる道がないからだ”(397頁)。ここで“今の青年のデカダンス”を嘆く朔太郎はこの頃の「青年論」のいくつかの論点を共有しているが、被害者意識に轉換されているところが興味深い。すなわち、彼の“純粹の藝術的良心”を“現實的事情の故に”“過去の文學者”“十九世紀的の詩人”と罵る“新しいゼネレーション”を、朔太郎は“本質的に非藝術として抹殺”(396頁)するのである。「十九世紀的と二十世紀的」同書、462-463頁に見るように、「新しさ」を求める詩人たちの代表格が春山行夫であった。同様の見解を展開したのが、「新しさについて」である。これを収録した『詩人の使命』には、西脇順三郎や春山行夫などモダニストを否定し日本浪漫派を支持する抒情詩人朔太郎の姿が闡明である。
- 85 鮎川信夫「『新領土』加盟についての覺書」、30。
- 86 同上、29。
- 87 鮎川信夫「中桐雅夫」、94頁。
- 88 拙稿「その1」、499を参照。
- 89 村野四郎「後記」『新領土』第3巻第13号(1938年5月) 68。『新領土』が順調であるという意識は、春山にも共通していた。鮎川の最初の作品「遊園地區」を掲載した3月号に、“『新領土』諸君の詩も、現在のところ一番いいと思ふ”と。春山行夫「後記」『新領土』第3巻第11号(1938年3月) 363を参照。
- 90 拙稿「その1」、500-504を参照。
- 91 『セルパン』1938年1月号は2月9日一斉封切りの広告を載せた。同号の「新春映畫の展望」はこう記した。“四年ぶりの登場”であり“最初、事變直前だつたか、チャップリン一流の莫大もない權利金を吹つけて、どうしても封切條件が折合はなかつたといふ因縁つきの大作”であり、“いづれにしても、二十年間我々に馴染んだダブダブズボンで、チヨビ髯、ドタ靴の喜劇役者とも、これでお別れにならう”と。筈見恒夫「新春映畫の展望」『セルパン』第84号(1938年1月) 127を参照。

- 92 田中純一郎『日本映画発達史』第3巻、65頁以下。また、「見られなくなつた映畫」『セルパン』第85号（1938年2月）102-106は、前年の禁止措置がさらに半年延長されたため上映不可能となつた作品をあげている。「アメリカ」映画の担当は清水俊二、「欧州」は岡田眞吉。
- 93 村野四郎「近代修身」『新領土』第2巻第11号（1938年3月）317。
- 94 春山行夫「後記」『新領土』第3巻第13号（1938年5月）68。
- 95 芳井研一「隣組」『平凡社百科事典』、その他、鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』、197-199頁を参照。なお、隣組は、1940年9月の内務省訓令「部落会町内会等整備要領」によって全国的に組織されることになる。
- 96 西脇順三郎「輪のある世界 文學と理智の問題」『輪のある世界』（第一書房、1933年6月）54頁。
- 97 同上、54-55頁。
- 98 同上、56頁。
- 99 日記の抜き書きは、西脇順三郎「文學の思想的價値」『輪のある世界』、131頁。
- 100 「田園の祭禮」には二つの原稿があり、ひとつは5月24日に“学友会雑誌にのせるため”に友人に手渡したものの、もうひとつが、7月17日にいう、“昨日「田園の祭禮」(2)を書いた”とされるものである。9月の『新領土』に掲載された「田園の祭禮」は、おそらく前者であろう。
- 101 河合榮治郎「序文」河合榮治郎編『學生と社會』（日本評論社、1938年6月）3頁。
- 102 恒藤恭「社會における學生の地位」『學生と社會』、73-74頁。つづく「結語」の引用は、82-83頁。なお、末尾に“昭和一三・六・一二”の日付がある。
- 103 参照、小田切進編「昭和文学大年表」『昭和文学全集』別巻（小学館、1990年）小田切進・今村忠純編「佐藤惣之助年譜」『現代日本文学大系』第41巻（筑摩書房、1972年）および、藤牧祐生「日中・太平洋戦争時代年表」。いわゆる“ペン部隊”に関する『新領土』の反応はつぎのとおり。
- 村野四郎は「後記」『新領土』第4巻第19号（1938年11月）75にこう記した。“從軍文士が派遣されて、その中に不當に諷刺詩人が混つてゐた。更に不満なことは、その詩人が今日では本當の詩人でなかつたことだ。これらの詩人はロマンチストであり古いフォーマリストであつたから、このやうな詩人から、何らかの新しいザハリヒな戦争詩の報告を期待するのは自體莫測々々しい事に違ひない。（改行）だが此處で考へられることは、吾々に重要であるべき有力な詩人は、斯る場合には必ず無力であると言ふことだ。”春山行夫は10月号の「後記」『セルパン』第93号（1938年10月）158にこのように記した。“文學者を從軍させるといふのなら、思想問題や、社會政治、國際問題等に、直接ふれてゐる人達も加はるべきであつた。しかし、なんといつても、今度の小説家の從軍は、エポックメイキングな事實で、新聞ジャーナリズムがあればほど、感激と讃辭を捧げた出來事は、

文學や思想の世界では、かつてなかつたことだといつていい。”

104 黒田勇「時間と身体近代化 ラジオ体操をめぐって」京都大学新聞社編『口笛と軍靴 天皇制ファシズムの相貌』(社会評論社、1985年) 183頁。

105 上田保訳 T・S・エリオット「死人の埋葬」『新領土』第3巻第16号(1938年8月) 272-273。同じ第1部は、すでに土居光知識で「荒廢の國」として「(1)屍を埋む」が岩波世界文学講座『文學形態論』(1933年12月)、88-95に登場し、つづいて『英文學の感覺』(岩波書店、1935年9月)、334-340頁に収録されていた。しかしながら、上田訳は若い詩人に与えた衝撃からは見逃すことのできぬ事件であった。なお、上田訳に先立ち、鮎川の仲間の筆になる『荒地』第5部の最終部分の訳が存在した。『『新領土』加盟に関する覺書』を載せた同号、中桐雅夫訳オルダス・ハクスレイ「作家と讀書家 5」『LUNA』第13輯(1938年5月) 5である。

おお、燕よ、燕よ、

「くずれた塔のなかのアキテイヌの皇子」

此の斷片で僕は滅亡から救はれた

だのに諸君には不適當なのか？ ヒイロニモがまた狂ひだした

興へよ、同情せよ、制御せよ、

シヤンテイ、シヤンテイ、シヤンテイ

底本は、Aldous Huxley, “Writers and Readers,” *The Olive Tree and Other Essays* (London: Chatto and Windus, 1938), p. 40 の “What the Thunder Said” の最終6行、すなわち、*The Waste Land*, 11. 428-433である。

106 西脇順三郎『超現實主義詩論』(厚生閣書店、1929年11月) 22頁。第3部「水死」訳(25-26頁)は、活字となった『荒地』のわが国最初の部分訳である。初出は、「プロファヌス」『三田文學』第1巻第1号[第二次創刊号](1926年4月)。

107 鮎川信夫「ギリシヤの日傘」『LE BAL』第15輯(1938年7月) 23。

108 二つの評論は、室伏高信「大學への警鐘と學生自治 學生檢挙の問題」『セルパン』第91号(1938年8月) 1-5; 阿部知二「社會と學生」同、5-6。

109 『新領土』第2巻第7号(1937年11月) 広告。単行本出版は、第一書房、1937年10月。

110 『セルパン』第93号(1938年10月)「戦時體制版」『ソヴエト旅行修正』広告。

111 村野四郎「後記」『新領土』第3巻第18号(1938年10月) 424。

112 室伏高信「文明の前途」『セルパン』第94号(1938年11月) 11。つづく引用は、12。

113 丸山幹治「ヒットラアとチエンバレン」『セルパン』同上号、5はこう記した。“四國協定は明かにロンドン、パリ樞軸のベルリン、ローマ樞軸に對する屈服である。(略)若し英佛が戦争しても構はぬといふ決意がありさへすれば、ヒットラアの出方はまた違つたかも知れない”と。

114 『新領土』第4巻第18号(1938年10月)裏表紙裏。また、『文藝汎論』第8巻第

- 11号(1938年11月) 目次前頁の「傷兵におくる戦争詩の夕」の広告よれば、後援は文藝汎論社。当日、傷兵保護院高橋指導課長の挨拶があったことは、衣巻省三「戦争詩の夕」『文藝汎論』第8巻第12号(1938年12月) 71。
- 115 近藤東「後記」『新領土』第4巻第20号(1938年12月) 140。
- 116 鮎川信夫「後記」『LE BAL』第18輯(1938年11月) 田村隆一「若い荒地」『詩と批評』D、38-39頁による。
- 117 村野四郎「詩壇印象 九三八年度」『文藝汎論』第8巻第12号(1938年12月) 27。
- 118 後年、鮎川は「われわれの心にとって詩とは何であるか」『鮎川信夫著作集』第2巻、159頁にこう記した。初出は、『詩と詩論』第2集(1954年7月)。
戦争詩の運動という、いわば超党派的な運動は、第二次大戦のだいぶ前から結集的に始まっていたと言えるのです。総動員法が成立した年、一九三八年、十月二十六日に「戦争詩の夕べ」というのがあり、ぼくは北村太郎と一緒に出かけたとあります。それらの時期のことを、『辻詩集』の詩人たちはすっかり忘れてしまったのでしょうか？ かれらは、都合の悪いことは、みんな忘れるという健忘症なのでしょうかね？
- 119 安田武『昭和青春読書私史』(岩波新書、1985年) 95-96頁によれば、発禁処分となった四著作は、『改訂社会政策原理』『ファッシュズム批判』『時局と自由主義』および『第二學生生活』。安田は鮎川より2歳若く1922年生まれ。当時中学三年生であった安田の回想は、安田武『昭和 東京 私史』(中公文庫、1987年) 221頁。
- 120 村野四郎「詩壇印象 九三八年度」『文藝汎論』第8巻第12号(1938年12月) 24。
- 121 鮎川信夫「田園の祭禮」『文藝汎論』第8巻第12号(1938年12月) 57。前注100を参照。発表までの経緯あるいは推敲のあとを辿ることはできないが、原形は、7月17日にいう、“「田園の祭礼」(2) ”、あるいは7月23日に記された“「田園の祭礼」(第二部) ”と推測される。
- 122 村野四郎「近代修身」『新領土』第3巻第13号(1938年5月) 25。拙稿「その1」、515を参照。
- 123 村野四郎「近代修身 廣場に於いて」『新領土』第2巻第9号(1938年1月) 225。拙稿「その1」、514を参照。
- 124 村野四郎「詩壇印象 九三八年度」、24。
- 125 酒井正平「最近の新領土」『新領土』第4巻第22号(1939年2月) 270。
- 126 村野四郎「眞冬賦」『三田文學』第13巻第2号(1939年2月) 62。ここでは「眞に賦」とされているが、誤植。長田恒雄「雪の降る日」は、63。「眞冬賦」は「鐵亞鈴」と改稿され、『體操詩集』(アオイ書房、1939年12月)に収録。
- 127 村野四郎「詩壇印象 九三八年度」、27。

- 128 F. R. [福原麟太郎]「片々録」『英語青年』第79巻第11号(1938年9月1日) 380。
このころ『英語青年』は毎月1日と15日に刊行されていたから、福原は8月下旬の執筆までに『新領土』の最新号を見ていなかったのである。
- 129 北村太郎「my Eliot」『北村太郎の仕事』第2巻(思潮社、1990年) 551-552頁。
初出は、『現代詩手帖』第30巻第10号(1987年10月) 64-65。
- 130 北村太郎「詩の翻訳 『風の夜の狂詩曲』をめぐって」『文学』[特集 T・S・エリオットを読む モダニズムの現在]第57巻第4号(1989年4月) 155。
- 131 田村隆一「T・S・エリオット」『詩と批評』A(思潮社、1969年) 233頁、
および、「10から数えて」同書、251-252頁。初出は、それぞれ、「解説」『エリオット詩集』(弥生書房、1967年) および、『田村隆一詩集』(思潮社、1968年)。
- 132 鮎川信夫「翻訳詩の問題」『鮎川信夫著作集』第5巻(思潮社、1974年) 168頁。
初出は、『詩学』[増刊号 特集現代詩とはなにか]第13巻第9号(1958年8月)。
- 133 拙稿「その1」 516を参照。
- 134 岡橋祐訳T・S・エリオット「ポオル・ヴァレリイの方法」『新領土』第2巻第11号(1938年3月) 333。
- 135 評論の翻訳については、拙稿「歴史の感覚をめぐって 戦前のT・S・エリオット理解の一側面」同志社大学法学会『同志社法学』[200号記念論集]第39巻第3・4号(1987年11月) 161以下を参照されたい。
- 136 たとえば、“詩人が現在の自己を自分よりも価値あるものに絶えず委ねてゆくことはよく見受けられるところであらう。芸術家の進歩は不断の自己犠牲であり、絶えず個性を滅却してゆくことである。”参照、鮎川信夫「批評家の態度に関するノオト」『荒地』第3輯(1939年7月)。原資料未確認。『鮎川信夫著作集』第7巻、142頁による。この一節が依拠したのは、矢本貞幹訳『文藝批評論』(岩波文庫、1938年5月) 29頁。
- 137 羽生豊訳T・S・エリオット「現代教育と古典」『LE BAL』第15輯(1938年8月) 5。原文は、“There are two and only two finally tenable hypotheses about life: the Catholic and the materialistic.” 底本は、T. S. Eliot, “Modern Education and the Classics,” *Essays Ancient and Modern* (Faber and Faber, 1936), p. 172。
- 138 福原麟太郎「エリオットの同時代的記憶」『福原麟太郎著作集』第10巻(研究社、1969年) 335頁。初出は、「現代世界文學全集月報17」『現代世界文學』第26巻(新潮社、1954年3月)。
- 139 このことは、英文学研究におけるエリオット理解と共通する。拙稿「歴史の感覚をめぐって 戦前のT・S・エリオット理解の一側面」 158を参照されたい。
- 140 加納秀夫訳ウインダム・ルイス「エリオット論 リチャーズ及びエリオットの理論に於ける『誠實』」 および、守木清訳スティヴン・スペンダ「エリオット論」『新領土』第3巻第18号(1938年10月) 370-377; 416-418。
- 141 奈切哲夫訳G・W・ストウニア「オーデンの過程」『新領土』第3巻第18号

- (1938年10月) 407。これは、“The Fire Sermon,” ll. 173-181を冒頭に引用して、オーデンの詩風を論じたもの。
- 142 「読書日記」の9月6日には、『詩と詩論(4)』がある。この『詩と詩論』第4冊(1929年6月)の特集は「世界現代詩人レヴイユ」である。エリオットについては、263に、春山行夫が担当。
- 143 北村常夫訳T・S・エリオット「傳統と個人的才能」『詩と詩論』[アメリカン・ナンパア]第8冊(1930年6月)、88。これは、上注136の、鮎川信夫「批評家の態度に関するノオト」、142頁で、矢本貞幹訳とともに引用される。
- 144 佐藤清「エリオット」[岩波講座世界文學2回][近代作家論](岩波書店、1933年1月)。佐藤は、“最も単純な言葉を用ひながら、而かも難解無比なることは多くの讀者を昏迷せしめる”『荒地』(4頁)は、“非個性を發展せしめたものであつて、これより完全に個人我を超越し、これよりも完全に意識を抽出したものを想像することが出来ない”(14頁)という。他に、井上思外雄「ティー・エス・エリオットの『荒地』」『英語英文學講座』(新英米文學社、1933年8月)があるが、これは予約で配本されていた。
- 145 大澤衛安藤一郎共訳T・S・エリオット「パスカルの『感想録』」『新領土』第4巻第19号(1938年11月) 26。
- 146 鮎川信夫「近代藝術」[書評]『LE BAL』第19輯(1938年2月) 34。同じく、「滝口修造『近代芸術』」『鮎川信夫全集』第2巻(思潮社、1995年) 619頁。
- 147 鮎川信夫「覺書 現代詩の性格的變化と方向」『LE BAL』第19輯(1938年2月) 1-2。末尾には、日記の記述どおり、“13年12月26日”と記されている。『鮎川信夫著作集』第7巻では、120-121頁。
- 148 鮎川信夫「『新領土』加盟についての覺書」『LUNA』第13輯(1938年5月) 30。
- 149 鮎川信夫「覺書 現代詩の性格的變化と方向」 2。
- 150 同上、5。
- 151 鮎川信夫「詩的青春が遺したもの」『鮎川信夫著作集』第8巻(思潮社、1976年) 211頁。初出は「<私>の誕生」『現代詩手帖』第17巻第3号(1937年3月)。
- 152 鮎川信夫「後記」『荒地』第1輯(1939年3月) 48。
- 153 鮎川信夫「不安の貌」『荒地』第2輯(1939年5月) 32-33。『鮎川信夫著作集』第7巻では、131-132頁。
- 154 同上、35。
- 155 一戸努訳T・S・エリオット「批評に於けるエクスペリメント」『詩と詩論』別冊『現代英文學評論』(1930年11月) 294。鮎川信夫「不安の貌」の引用は、36。
- 156 わが国のエリオット理解におけるこの評論の特殊な受容形態については、拙稿「歴史の感覚をめぐる」 160-161を参照。
- 157 鮎川信夫「不安の貌」 36。

- 158 鮎川信夫「詩的青春が遺したもの」、270頁。のちの“神戸詩人事件”についても、同書、264頁。初出は、「神戸詩人事件」『現代詩手帖』第17巻第9号(1974年9月)
- 159 鮎川信夫「雑記」『文藝思潮』通巻第6輯(1940年12月) 65。
- 160 鮎川信夫「困繞地」『文藝思潮』通巻第6輯(1940年12月) 57。『鮎川信夫著作集』第7巻では、189頁。なお、前半部は、『鮎川信夫全集』第2巻、620-629頁に収録されている。
- 161 中橋一夫訳 T・S・エリオット「現代教育論」『文學界』第7巻第1号(1940年新年號)、211。
- 162 中橋一夫訳 T・S・エリオット「現代教育と古典」『異神を追ひて』(生活社、1943年6月) 143頁。
- 163 たとえば、鮎川信夫「キリスト教とマルキシズム」『鮎川信夫著作集』第10巻(思潮社、1976年) 355頁。初出は、『純粹詩』第2巻第10号[通巻第20号](1947年10月)
- 164 鮎川信夫「詩的青春が遺したもの」、210頁によれば、誌名を提唱したのは国文科の山根平であったという。上田訳の4行をつけたのは、編輯者鮎川であった。
- 165 鮎川信夫「T・S・エリオット」『鮎川信夫著作集』第6巻、352-353頁。

Nobuo Ayukawa and *Shin-Ryodo* (2)

Akira NAKAI

Key Words: Japanese modernist movement in the 1930's, Nobuo Ayukawa, *Shin-Ryodo* (Poetry Journal), T. S. Eliot

Two months after the inauguration of “*Shin-Ryodo*”, the “Marco Polo Bridge Incident” broke out in July 1937. In August the government launched the “National Spiritual Mobilization Movement” to promote popular support for the war and to combat domestic dissent, especially among the intellectuals as well as on the left. Along with this movement a contest was held for a National Song, and, after the fall of the Guomindang capital at Nanjin, the “Patriotic March” was released in late December. The year was closed with the general excitement over the song.

This is the backdrop for the formative period of Nobuo Ayukawa: he began writing for the readers’ poetry column in “*Wakakusa (Young Grass)*”, a journal for would-be poets; in September became a member of “LUNA”, a little magazine run by a young poet, Masao Nakagiri; and continued to write for the columns in the established journals: “*Bungei-Hanron (Literary Summary)*”, “*Nihon-Shidan (Japan Poetical Circle)*”, and “*Rou-Ningyou (Wax-Doll)*”. Ayukawa joined the “*Shin-Ryodo*” in February the next year, a month before the “National Mobilization Law” was enforced.

In this general climate, some poets had already volunteered to write war poems, but the “*Shin-Ryodo*” kept a distance. In terms of political stance, Shiro Murano, a leading poet of the group, cautiously warded off what the British “New Country Group” held, saying, as early as November 1937, that the poetry and criticism the journal carried in every number did not signify its commitment to the leftist movement, but rather was an introduction to

the new trends in literature abroad. A possible tactic to be employed by the poets, Murano suggested, was satirical detachment, which was embodied in his series, “Kindai-Shushin (Modern Morals)” composed from 1937 to 1938.

And yet, the “*Shin-Ryodo*” could not ignore the atmosphere of the times and mere satirical distance would not suffice. On the 26th October 1938 the “Evening for War Poems Dedicated to Wounded Soldiers” was held, sponsored by the “Tokyo Shijin Kurabu (Poets Club)”, whose members mainly comprised the senior poets of the “*Shin-Ryodo*”. Ayukawa went there and was never to forget the occasion. The “Evening”, one of the first organized commitments on the part of the modernist poets, would lead to the formation of the “Japanese Poets Association” in October 1940, which eventually became a branch of the “Patriotic Association for Japanese Literature” in May 1942.

The “*Shin-Ryodo*” in the year of 1938, however, was active and introduced something important to the Japanese poetry scene: the translation of the first part of *The Waste Land* (August). “The Burial of the Dead” of T. S. Eliot was already translated by Kouichi Doi in 1933, but Tamotsu Ueda’s version gained it wider readership, having a profound impacts on young poets. Ayukawa, who had already shaken off the lyricism of Sakutarō Hagiwara and now believed himself a modernist, found something completely different from works written by the Japanese contemporary poets, “something dark, cynical and yet contemplative.” There also appeared Eliot’s criticism: “A Brief Introduction to the Method of Paul Valéry” (March); “Religion and Literature” (June); “The *Pensées* of Pascal” (November). The articles by the “New Country” poets printed in the journal were, of course, full of references to Eliot, their “ancestor.” In addition to these, Eliot essays read in translations by Ayukawa in the same year include: “Modern Education and the Classics” by Yutaka Habu, a member of “LUNA”; and “Experiment in Criticism” by Tsutomu Ichinohe

in the “*Shi-to-Shiron*” (June 1930), which he bought secondhand.

Scattered accounts in Ayukawa’s diary in 1938 show the way a young modernist accommodated Eliot in his vein. It was Eliot’s criticism rather than his poetry that help him frame his mind. In November when under the pressures of the times mere detachment seemed hard to maintain, Ayukawa encounters “The *Pensées* of Pascal”. A passage reads: “His [Pascal’s] despair, his illusion, are, however, no illustration of personal weakness; they are perfectly objective, because they are essential moments in the progress of the intellectual soul; and for the type of Pascal they are the analogue of the drought, the dark night, which is an essential stage in the progress of the Christian mystic.” He does not make any specific comment about this, but his accounts that follow the dates reveal that a “tenacious/unyielding mind” was being framed to establish his “raison d’être” as well as his criteria for poetry. Thus Eliot, the “*Shin-Ryodo*” introduced to Ayukawa, provided him with a stand which could, in turn, challenge its limit.